
失恋女と失業女

日野 花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失恋女と失業女

【Nコード】

N8418K

【作者名】

日野 花

【あらすじ】

亜子、智子、優美の三人は高校時代からの友人。優等生の亜子が「バカの優美」を諷め、智子がそれを傍観しているという関係だった。卒業すると三人は疎遠になっていったが、36歳のときに優美は失恋のショックで伊豆の別荘に引きこもる。しかしすぐに時間も自分ももてあましてしまい、智子に相談する。智子はちょうど亜子が失業して家にいるから、別荘に呼んではどうかと提案する。しかし別荘に来た亜子は気落ちした状態を通り越し、軽うつ状態に陥っていた。とても失恋の相談に乗る精神的余裕はなく・・・（全1

3
話予定
(

一 不幸な女と一緒に暮らすのはよくないか？

《実家にいるのもいたたまれない。何を責められるわけでもないけれど》

と、亜子からメールが来たのは九月に入ってすぐでした。亜子は大学卒業以来、十五年近く勤めていた法律事務所を辞めて、転職活動をしていました。しかしおいそれとは再就職先がみつからず。収入がなくなるからと、会社を辞めて三ヶ月もしないうちに都内の賃貸マンションを引き払い、大宮にある実家に帰ったとのことでした。《優美も今失恋で参っていて、伊豆の別荘に一人でいるんだって。知ってた？》と返信。

《知らない。でも優美の失恋なんていつものことじゃん。そんな呑気な落ち込みと私の窮状は比べ物にならない。こっちの人生は現実に行き詰まってるんだから》

《でも今回はいつもと違うみたいだよ。だって優美って、今まで男とうまくいかなくなると、他人にいきさつを喋って回って大騒ぎするのがパターンじゃない。それが今回に限っては、別荘にひとり引きこもっちゃったんだから》

《それにしたって、たかが失恋で仕事も投げ出して別荘に行ける身分が、落ち込んでるなんて言っても説得力ない。あいつは三十六歳にもなつて、人生も他人もなにもかもナメている》

優美は亜子同様独身ですが、実家を出たことはありません。優美のお父さんは数軒の飲食店と不動産業を営んでいました。吉祥寺の実家はトイレが三つある＋LDKで、屋根つきの駐車場は五台分ありました。一人娘の優美はお父さんの会社の社員として、自宅で不動産や飲食店のチラシのデザインをしていました。

でも亜子にしたって、失業してすぐ家賃が払えなくなるほど逼迫していたはずはないのです。私がまだ独身だったころ、雑誌に独身OLの平均預金額が四百万と出ていました。私はこの半分も持つて

いなかったので驚いたら、そんな私に亜子が驚いていました。

「じゃあ、亜子はどのくらい貯金があるの？」

と私がさらに驚いて聞いたら、

「まあ、智子は海外旅行とか行ったりして、遊んでいるからね」

と質問には答えませんでした。それに加えて今は退職金もあるはずです。

《もう引越しちゃったのにこんなこと言うのもなんだけど、いきなり家賃光熱費が払えないということもないでしょう。ヘタに実家に戻ってから再就職が決まって、また一人暮らしを始めるとなると、無駄にお金がかかるんじゃない？》

亜子は、あんたが思うほど貯金もないのよ、と補足しつつも、

《この年齢でスキルもないのに再就職は厳しい。このままだと収入の目途が立つとも知れないのに、どんどん貯金が減っていくのには耐えられない》

振り返ってみると、二十年に及ぶつきあいのなかで、失恋した優美がひとりになりたい、と言い出すのも初めてなら、亜子が精神的に参ってると告白するのも初めてのような気がします。亜子は高校時代からずっと努力家の優等生でした。傷つきやすいプライドは高く、今日に至るまで弱体化している自分を告白できるひとではありませんでした。だからこうして、ありのままの自分をさらけ出せるようになったというのは、失職もいい経験なのかもしれません。「失職もいい経験」なんて私が思っていると知ったら、亜子は怒るでしょうが。

そう考えると、優美は根本的には変わってないように思えます。失恋でひとりになりたいなどと言い出すのは確かに珍しいのですが、ひっそり黙って別荘に行くようなことは、やはりありませんでした。八月の半ばごろ、メールで《今、電話で話せる？》ときいてきたので、話せるよ、と返信したらすぐに固定電話にかかってきました。「私、もうだめだよ。仕事してる最中に突然涙が出てきたりする。つらくてたまらない。友達の遊びの誘いも全然嬉しくなくて、明る

い顔してなくちゃいけないとか、楽しまなくちゃいけないこと自体が苦痛でたまらない。もう東京を離れてひとり静かな場所で傷を癒したい」

「でも別荘で実際にひとりになったら、最初はいいかもしれないけど、すぐに時間も自分ももてあますよ。そしたら失恋と向き合うしなくなるんだよ。こういうときは、仕事を頑張るとか、趣味に打ち込むとか、何か別のことに意識を向けたほうがいいよ」

「今までこんなことなかったもん。もう私は恋愛なんてできないんだよ。っていうか、もう怖くてしたくない。私はもう一生ひとりなんだよ。智子みたいに幸せな結婚をしてるひとにはわからないだろうけど」

普通なら嫌味に聞こえる最後の一節に、「そんなあなたが羨ましいわ」という響きを明瞭に載せることができるのが、優美の天分ともいえる人心掌握術なのです。もしこの台詞を亜子が言ったとしたら、それは率直に嫌味で、こちらの想像力不足を責めているのです。実際言ってもいない発言に対して、こんなことを言うのは失礼なのですが。

そしてびつくりするくらい予想通りの行動を取るのが優美です。一週間もしないうちに、今度は伊豆から《今、電話していい？》とメールが来ました。

「ひとりで別荘にじっとしていると、彼のことばかり考えてしまつて、あのときあするべきじゃなかったかもしれないとか、それにしたつて彼はひどい男だとか、そんなことばかり考えてしまつて、つらい」

だからそうなるって言ったよねえ、覚えてる？　なんて私は言いません。私だつて、もし亜子という存在がなかったら、「だから言わんこつちやない」くらいは言っていたかもしれませぬ。亜子は以前、優美についてこんなふうに言っていたことがあります。

「毎度のこととはいえ、自分の言動の軽さが恥かしくないのかと、却って感心する」

その通りなのですが、言い方が軽蔑に満ち満ちていたので、私の身が縮むような思いがしました。

「じゃあ、もう東京に帰ってきなよ。きっともう伊豆の自然に癒されたんだよ」

「そんなことない。この失恋の傷はそんなに生易しいものじゃない。それにこっちで仕事するからって、家からマックとか持ってきてちゃったし」

重要なのは後ろ半分に聞こえました。「休職扱い」で家を出てきて、あっさり帰ったら家族に対して体裁が悪いようです。

「そういえば亜子が失業して実家に戻っているんだけど、家にいるのもいたたまれないって。亜子を別荘に呼んであげたら？」

魔が差した、という感覚が私を過ぎりました。

私は建前ではなく、心の底から、善良で誠実な人間でありたいと思っと思っています。そうなりきれなかったとしても、そこを目指そうとする人間にこそ、幸せになる資格が与えられるのだと信じています。他人の不幸は蜜の味、なんて下劣な言葉に身を任せる自分がいたとしても、そんな自分に行動や心情のすべてを預けるようなことはない程度の人間には成長しているはずです。三十六年の地味な人生でしたが、そんな私でも自分を誇らしく思える境地に至っているはずなのです。

「へえ、亜子、まだ仕事みつかってないんだ。誘ってみようかな」
そう言うと、優美は電話を切りました。

気に病むことはないと思いました。どの途亜子が「バカで厚顔無恥の」優美と二人きり、しかも東京を離れて本当に二人きりの場所で寝食をともにするとは考えられませんでした。

翌日会社でランチの時間、女友達に亜子と優美の「別荘暮らし」の話をしました。

「それ、まずいんじゃないの？」

「どうして？ 失恋した友達にすれば話し相手ができるし、失業した友達にすれば、居辛い実家から一時的に離れて一息つけるから、

いいかと思っただけ。旅行と違って、長居してもお金からないし」

「マイナスの状況にいる人間が一緒にいると、相乗効果でマイナスのパワーが高まるんだって。だから失恋した女の子はむしろ、幸せな恋愛をしている友達と一緒にいるほうがいいんだって。失恋したものの同士、傷心旅行に行くのが最悪のパターンらしいよ」

美容院で見た雑誌の占い特集に書いてあったそうです。何となくわかるような気はします。やはり私は根性悪くも、高校時代からの友人二人の逆境に拍車をかけるような提案をしたのでしょうか。でもしつこいようですが、心配には及ばないはず。やはりあの亜子が、私という仲介なしに優美と二人きりで朝昼晩と一つ屋根の下で過ごすとは考えられません。就職が決まらなくて相当気落ちしているようだし、きつと優美の長い痴話を聞くエネルギーもないでしょう。

昼の休憩を終えて席に戻ると、すぐに私はこの件について忘れました。そしてその日の帰りの電車の中で、こんなメールを受け取りました。

《優美から別荘に誘われた。智子が提案してくれたんだってね。父が定年退職で家にいるし、無職で家にいるのキツかったんだ。ありがとう。とりあえず伊豆にお邪魔してみるよ》

私は伊豆に「不幸の館」を出現させたのでしょうか。

二 不倫はよくないか？

私たち三人は都内の私立の女子高出身で、三人とも三年間男つ気なしで過ごしました。もちろん避けていたわけでもなく、単に縁がありませんでした。そうじゃない同級生もたくさんいました。そういう同級生に対して、優美は嫉妬と羨望を隠しませんでした。

「。。ちゃんは脚が細くて長いからもてる」とか、

「××ちゃんは 駅（男子高の最寄り駅）で乗り換えるから彼氏できた」

とか平然と言つてのけては、

「脚が細くて長いのは彼女だけじゃない」とか、

「 駅で乗り換えるうちの生徒は大勢いる」

と亜子に逐一否定されていました。一見、浅薄な思考がタダ漏れになっている優美を亜子が毎回バカにしているようにも見えましたが、優美はどうしても頭に浮かんできてしまうバカな考えを口にして吐き出しては、亜子の断固とした口調で否定されることで、モヤモヤしたものをすっきりさせているように見えました。私は、いつも生真面目に優美の話を拾う亜子のマメさに感心していました。私は面倒なので、優美のそういった発言には返事をしないことがほとんどでした。でもそういうふうに三人で一緒にいるのは好きでした。

高校を卒業して私は付属の短大の国文科、亜子は有名な女子大の英文科に入学しました。優美はと言うと、イラストレーターになると言つて、デザインの専門学校に入学しました。ここから優美は開花しました。男関係が。

とにかく男がいなときはなく、友達ができるように彼氏ができました。複数の相手にごちゃついているときもしばしばでした。そしてなにか男関係で起こるたびに、

「ねえ、聞いて」

と逐一私たちに報告してきました。高校時代のように同じ学校に

通っているわけではないので、その時々で私が亜子に電話で話したり、休日に優美の家に集まって話を聞いたりしました。優美は聞いて欲しい話を常に「恋愛相談」の形で語りました。私は聞く気のあるときは聞いて、面倒なときは聞き流し、聞きたくないときは敢えて別の話題をふったりしました。そのうち優美は私より亜子に電話をするようになりました。亜子は高校時代同様、常に優美の話にきちんと耳を傾け、律儀にアドバイスをしていました。時間を置いて三人で会うと、私の知らない優美の恋愛沙汰が始って終わっていることがありました。そういうとき私が何の話かわからなくてぽかんとしていると、

「そういえば、これは智子に話していなかったよね」

と優美が勝ち誇ったように言うので、さらにぽかんとしてしまうことがよくありました。そういうとき亜子は私に気を使って、優美の恋愛顛末をかいつまんで話してくれました。亜子は優美より要約が上手でした。

私はのけ者にされているような、寂しい気がすることもありましたが、優美の痴情顛末にはつきあいきれない、と思うこともありました。

「彼の友達に好きになったって言われたの。どうしたらいいと思う？」

などという「恋愛の悩み相談」は明らかに彼女の自己表現の場でした。優美がアドバイスなんて求めていないことは明らかでした。アドバイスを求めることで、私たちを話にひきつけ、自分への関心を実感したかったのだと思います。そんなことは亜子もわかっているだろうと思っていました。だから亜子が律儀に応えるのは、亜子もアドバイスを自己表現として楽しんでいるんだろうな、と思っていました。

短大を卒業すると私は鉄道会社に事務職で就職し、その二年後に亜子は法律事務所に秘書として就職しました。優美は専門学校を卒業してからニューヨークに「美術留学」しました。離日するときは

帰国は何年後になるのか、もしかしたらソーホーに定住してしまうかも、という話でしたが、一年ほどで帰国。特に挫折したような風情もなく、いわゆるフリーターとなって日本でお小遣いを稼ぐようになりました。米国滞在中はもちろん白人男性とも黒人男性とも交際したようですが、それほど英語は上達しなかったようでした。優美曰く、「そんなのはなんとかなる」とのことでした。

この頃から私たちのやりとりも世の中の流れに倣って、電話からメールに移っていきました。専門学校時代、優美の恋愛対象は「アーティスト系」の学生ばかりでしたが、帰国してからは「自称」つき「アーティスト」に変わりました。イラストレーターだか、カメラマンだか、映像作家だか、役者志望だか、バイトで稼いだお金も「自己投資」や「作品作り」につき込んでしまう人たちでした。優美は食うや食わずの貧乏人たちのアパートに通い、現金をあげたという話こそ聞きませんでした。スーパーでの支払い彼女もちで、彼のアパートで食事をするというパターンがよくありました。そんな風に相手は所帯をもてそうにない独身男たちばかりだったのですが、二十七歳くらいのころの相手は定職についた妻子持ちでした。

この三十代半ばの男性は優美が当時働いていた旅行系出版社の社員でした。優美は旅行関連の出版物を多く出すこの会社なら、イラストの仕事をさせてもらえるかもしれないと、まずは事務のアルバイトで入社していました。最初は彼と社内で見配せしたり、こっそりとメールのやりとりをしているといった内容が私たち二人に配信されてきましたが、やがて召集令状が来ました。私たち二人は優美の吉祥寺の豪邸にお呼ばれしました。

「奥さんがいるなんて、関係ない。私には彼しかみえないもの。ただ一緒にいたいだけなの。別に結婚したいとは思ってないし。でもやっぱりどうしよう」

私は優美と違って、高校時代から今に至るまで「恋多き女」には程遠く、当時は結婚して一年経つか経たないかの頃でした。不倫の是非について、やはり夫が浮気したらどんな気持ちになるかとか、

私の父が母を裏切ったらどうしようかなどと考えて、不倫の当事者の立場でものを考えることはできませんでした。私は亜子がなにか言うのを待ちました。

「あんだ、自分の彼氏や夫が浮気したら、同じこと言って相手の女の立場を認められる？」

断固たる保守的口調に私はほっとしましたが、その安心感こそが経験不足による了見の狭さの表れのような気がして、嫌でした。

「だからさあ、結局奥さんに知らなければいいわけでしょ。私も彼も知らせようなんて気なんてないし。それなら誰も傷つかない。彼も家庭を壊して私と、とか考えてないし。家庭は生活で、恋愛は別じゃない。私も彼と生活したいわけじゃないし。よくいうじゃん、浮気してる男の人って、楽しかったりして気持ちに余裕ができるから、却って奥さんに優しくなったりするって」

「じゃあ、あんたはその人と不倫関係になることで、あくまでも彼の家庭生活に貢献するし、そういうふうにな倫するなら、夫の浮気も歓迎なんだ」

「そうねえ。私、結婚願望ないし。もし浮気しても、セックスレスで私ともしないし浮気相手ともしないなら、私ともするし、浮気相手ともするほうがいいな」

そして優美はその男と不倫関係になりました。

《亜子の話を思い出して、不倫なんてやっぱいいけないって、何度も思ったのよ。いつか天罰があたるかもって。でも結局、好きな人でしよう。断れないわ。でもやっぱりやめたほうがいいよねえ。どうしよう。でも結婚しているひとつで、やっぱり違う。大人っていうか、包容力がある》

優美に社会規範に真っ向から反旗を翻して、不倫に邁進する度胸がないことはわかっていました。優美の度胸はもっと別のところにあります。

《私、今までフリーターみたいな男の人とばかりつきあってきたでしょう。だから、食事代を毎回当たり前みたいに出してくれること

とかが、すごく感動的なもの。私が半分出すって言っても、いいって言っのよ。最初だけじゃなくて、いつもだよ」

優美の不倫デートの報告は、これまでと同様、私たち二人に律儀に配信されてきました。私は返事のしようがないのでしませんでしたが、亜子は一生懸命、早いところ止めるようにと説得を続けました。そして一ヶ月も過ぎると、様子が変わってきました。

《携帯に電話したら、出たくせに、今は家だから話せないって。だったら出ないであとからメールくれればいいじゃない。言い方が冷たいのよ》

優美が今までつきあった「アーティスト系」の男たちは、お金はないけれど時間が余っていました。美は四六時中連絡を取り合って肉体的にダメなら精神的にと、常にべったりしていました。優美は男にお金や甲斐性を求めなかったため、ある種の女たちにつきものの計算高さがなかったことを美点のように私は思っていました。

とにかくそんなふうに既婚男ともめ始めて、結局男から、「そんなにマメに連絡取ったり会ったりしなくちゃだめなら、独身の男とつきあえよ」

と言われたのきっかけに別れることにしました。

「そんなこと言うなんてひどい、私のことどう思っているの」

とラブホテルの出口で号泣し、物別れしたそうです。その週末にかけられた石崎家招集ではたいそうご立腹の様子で、

「むかついたから携帯からアドレスを即消去した。これで不倫も止められるかと思うと清々する」

「だって働いていて家庭もあつたら、そうそう時間も取れないでしょう?」

「だったらつきあう意味なんてないよね」

その後優美は男の言うとおり、独身男に戻りました。でも不倫だろうが会社員とつきあったのをきっかけに「アーティスト」は卒業して、普通のサラリーマンとデートするようになりました。二人同時で、ひとりは会社に入りにしていた取引先の社員で同年、もう

ひとりは合コンで知り合った年下でした。ただ二人ともデートはするけど、特に優美とつきあいたいというような強い意志表示はないようでした。同い年の男はバイトとはいえ取引先の女の子と恋愛関係になることに踏ん切りがつかないようでしたし、年下は「彼女のようなひとはいるんだけど、最近うまくいってない」とのことでした。

《どうしようかな、ってかんじ》

《そんなのナメられてるんだから、二人とも止めなさい。そんなふうに自分を安売りするのはよくない》

優美はいつものように、亜子の言うことには全く納得だと返信してきました。

そんなふう二人の男相手にのりくらりとデートしてキスしたりしていると、不倫相手から数ヶ月ぶりにメールが来たとお知らせが配信されてきました。すでに一度会って食事をしたようでした。

《やっぱり男は年上に限る》

と書き出されていました。

《登録のないアドレスからメールが来て、なんだろうと思ったら彼だった。やっぱり会ってみると、こんなに大好きで、私をはつきり求めてくれる人はいない。でも私ってば、いつメアド消しちゃったんだろ。全く思い出せない》

私は覚えていたので、覚えている自分になんだかガッカリしました。

《というわけで、今度の日曜日にでも会わない？ もちろんうちに来てくれてもいいし》

優美の豪華実家と素敵なデザートのおもてなしには惹かれましたが、私は今回は《残念だけど先約があるので、次にまた誘って欲しい》と遠慮することにしました。優美も優美の家族も気前のいい人たちでした。金持ちなら気前がいいとは限らないのは言うまでもないことです。優美と優美のお母さんは、おもてなしを楽しめる、真に裕福な人種でした。お父さんにお会いしたことはありませんが、

妻子にケチを強いていないあたりで、察することはできます。

お誘いを断った翌日に、亜子から私だけに宛てたメールが入っていました。

《優美のバカ話を聞きたくない気持ちはよくわかります。ただここで私も断ったら、三人で会える日をまた仕切りなおすことになるでしょう。お願いだから、一緒に優美の話を聞いてください。本当に都合が悪いなら、別の日でも構いません。私をひとりにしないでください》

丁寧語の文面にぎよつとしました。

不倫が男女の仲に起こりうる仕方のないことなのか、だからといって許されることではないのか、どこに視点を置くかによって、断罪されたりされなかったりする程度のものなのか、私にはわかりません。でも亜子のメールをみて、現在進行形の不倫が他人から理解や共感を得るのはなかなか難しいものだな、と思いました。

既婚の彼との関係は、それからすぐに終わりを告げたようでした。《やっぱり一度ダメになったものはダメね。アレもかなりイマイチだった。お互い結局白けてしまった》

その白けっぷりが切なくて、

「やっぱりダメなのね、私たち」

と、また優美はラブホの一室で号泣したそうです。優美の不倫レポートは、このやや赤裸々な報告をもって本当に終了となりました。その後も優美の恋愛遍歴は重ねられていきましたが、不倫はこれつきりでした。理由は既出にあるとおり、

《思つようにいちゃつけなくて、つまらない。ストレスたまるだけ》。

でもこの優美の不倫事件以後、

《いろいろあつてさ。来週末とかうちに来ない?》

というお誘いメールに亜子が即、

《来週末はわからない。行けたら行くね》

といった返信をするようになりました。さすがの優美も察すると

ころがあるようで、それから優美のお誘いメールもなくなっていきました。それでも優美の恋愛顛末の報告メールだけは配信されてきました。それにも亜子は返信しないようになりました。私はもともとあまり返信をしなかったのですが、あれだけマメに返信を入れていた亜子が全くしなくなったのは露骨でした。優美はそれでも私と亜子にメールを配信し続けましたが、男と激しくもめたり新展開があつたりと興奮が頂点に達すると、私の携帯にだけ《今、電話で話せる?》とメールを入れてくるようになりました。私は話を聞く気分の時には聞いたし、忙しいときや気乗りしないときには返信を入れなかったり、断つたりしました。私は以前からそうだったので、断つても優美に気にする気配はなく、また次の興奮のときには、《今、電話で話せる?》とメールが来ました。

三 ひとは必ず救われるか？

石崎家の別荘は伊豆の別荘街の一画にあります。吉祥寺の本宅とは比べ物にならないにしても、2LDK二階建ての立派な一軒家。年に何日使われるのか知りませんが、インターネットもきちんと完備されていました。だから優美も本当に必要があったのかどうか不明ですが、マックなどを持って行って「あっちで仕事をする」と言うことができたようです。一階の居間にウインドウズが置いてあって、二階の優美の部屋のマックもネットにつながっていました。だから伊豆に滞在中、時間も自分も人生ももてあました「不幸な二人の女たち」がメールを書くのに不自由はありませんでした。亜子からのメールは一週間に一度あるかないかでしたが、優美は日に何通も送ってくることがありました。亜子が伊豆に行く前日には、優美からこんなメールが来ました。

《今まで彼氏と別れるたびに、すごくイライラしたり悲しかったり、傷ついたりしたけど、でも心のどこかで次がある、って思ってた。でも今回は違う。もう次なんてない。でもそんな私を神様はかわいそうに思ってくれたんだね。ちょうどこの時期に亜子が失業して伊豆に来られるなんて》

具体的な信仰心があるわけではないのですが、優美はよく「神様」を持ち出してきました。

優美は伊豆高原駅に愛車プジョーで亜子を迎えに行きました。亜子は免許を持っていません。これは伊豆にあつて、亜子は優美なしに散歩以上の外出は難しいことを意味します。

亜子が改札から出るとすぐ、満面の笑顔で手を振る優美が視界に飛び込んできました。

「久しぶり！ 何年ぶりだっけ？ 亜子、全然変わってない！」

亜子は《さらにどっと疲れ》たそうです。失業とままならない再就職活動のストレスで高校入学以来の最低体重になっていた亜子は、

優美の言葉にがっかりしました。

別荘に着くと、優美は二階にある二つの部屋のうちのひとつを亜子の部屋としました。

「なんでも好きに使って。好きなだけいていいからね」

ありがとう、という言葉に身寄りのない病人のような響きを感じて、亜子はさらに惨めになりましたが、優美に特に感じるころはなさそうでした。

亜子は居間のソファに身も心も疲れた身体を沈めました。伊豆に来たからといって、将来の不安の何がなくなるわけでもないけれど、とりあえず移動が済んだと思っただけでほっとしました。

《しばらくここで、家族に気兼ねすることも、家族が見るテレビで世の中の動きを見せつけられることも、街中で日々会社に通う人を見ることもなく、じっとしてられる。本当にありがたい》

そう思つて亜子がふと部屋を見回してみると、テレビ台の上に「愛される女性になる法則」という単行本が置いてありました。

「この辺ね、海も近いし、温泉もあるし、山のほう散策してもいいし、スーパ―も近いけど、けっこう美味しいレストランも何軒あるのよ。お互い本当に大変だったわよねえ。似たもの同士慰めあつて楽しく過ごせば、きっと嫌なことなんて忘れられるよ」

優美は前向きな自分を美しいと思いましたが、そんな優美に亜子は冷たく言い放ちました。

「あんたは既に救われてるよ。私と違って」

優美は今回の失恋の顛末についてもメールで配信していましたが、亜子が読んでいないことは私も優美もわかっていました。送らなければいいと思うのですが、優美はそれは三人の友情に決定的なヒビを入れる、やってはいけないことと思つているようでした。もちろん一方的に送りつけているのは百も承知なので、読まれていないことにそれほど不満は抱いていないようでした。少なくとも私は読んでいますし、亜子はその気になったら読んでくれればいい、と送り続けてほぼ十年。亜子はずっと以前から、「迷惑メールのように迷

惑報告もできず、迷惑メール以上に迷惑」と言っていました。

「それが、今回は違うの。ねえ、あとでゆっくり話すよ」

「いいよ、話さなくても。優美はすぐに次の男見つけて、ケロっとするよ。それで私と一緒に不幸がってたことなんてあったかしら、って顔するんだから。私は人生に実際行き詰まってる。私とあなたの不遇は比べ物にならない。安心していいよ」

「違うの、今回のはなんか、全然立ち直れる気がしないの」

「今優美がこれまでになく気落ちしてるのは本当なんだろうと思うよ。でもどうせあなたのほうが先に復活するから安心ななって。っていうか、今だってみるからに元気で、はつらつとしてるじゃない。離婚ならまだしも、失恋なんて失業の前にはお気軽だよ。私は野垂れ死にするかもしれないのに」

《よくよく考えたら亜子とは智子の結婚式以来会っていなかったし、その間メールのやりとりもほとんどなかった》

優美は自分の好きな以前の亜子、強い正義感と信念で自分を諫め、そうして弱い自分を受け止めてくれる亜子を伊豆に迎えることを心待ちにしていました。もちろん亜子が失業で落胆していることは知っていました、《本物を見るまでどういうことか、わかっていなかった》。

「あなたのほうが必ず先に復活する」

憂鬱な顔できっぱり言い放つ姿が怖かったそうです。

《十年間ろくに連絡とってなかったことになるけど、亜子ってまだ処女なのかな》

その日の優美のメールはこう締めくくられていました。

四 男は不実か？

亜子が伊豆に来た夜、優美は車で十分のイタリアンレストランに行つて、歓迎会を開くつもりでした。小さいけれど小粋なあのイタリアンに行つて、二人でワインを飲みながらポルチャー二の Pasta に舌鼓を打ち、自分の失恋顛末について話して楽しく過ごす、という予定を決め込んでいました。

「ごめん。私、移動だけで疲れてるし、あまり食欲もないんだ」

亜子の伏目がちな憂鬱は断固としていて、全身でその正当性を訴えているようでした。優美はそんな病人様相でひとの別荘に来てはいけないのではないかと思いました。ここは病院じゃないんだから「じゃあ、夕飯どうしようか」

「どうしようか」

律儀な亜子はまず、滞在中の経費をどう負担すればいいか、優美に相談しました。優美は自分の失恋治療につきあってくれるのを前提に、亜子をお客様としてもてなすつもりでいたので断りました。そもそも光熱費他は優美本人の負担ではなく、父親の負担なのだからと。それにしてもタダで居座るわけにはいかないと、亜子も主張してやまず。昔からですが、亜子が主張したすと相手につけ入る隙を与えません。結局滞在中のスーパーでの買い物他食費雑費等の支払いは全額亜子が負担することで落ち着きました。優美は《ふさぎ虫》に長期にわたつて居座る権利を与えてしまったような気がしました。

《やっぱり神様っていないのかなあ。これといった大きな善行をした覚えもないけど、大して悪いことをした記憶もないのに》。

食欲に歴然とした違いのある二人は、夕飯をなににするかも決まりません。亜子は別々に食べたいくらいでしたが、来た早々にそれを言うのは、さすがに憚られました。優美が楽しみにしていたらしいイタリアンだって断っています。優美の好きなものでいいよ、と

言うしかなく、結局別荘でパスタを食べることになりました。二人は鬱々として車に乗り込むと鬱々としてスーパーに行きました。亜子は財布を渡して優美ひとりに行ってきたほしいくらいでしたが、やはりイタリアンを断った以上、それはいけないと思いました。優美はアルコールはそれほど好きではなく、亜子のほうが酒好きでした。だからワインでも飲めば少しは機嫌も直るかと、優美は酒屋に寄ってワインを買いました。これは払うと主張する優美を、亜子は断固として断りました。

優美はトマトのパスタにフルーツサラダを作りました。さらに実家からもってきた缶詰のフォアグラを開けてフランスパンを並べ、ちよつとしたパーティ気分を盛り上げようと試みましたが、無駄になっではいけないという亜子の進言で、開封せず片付けることになりました。

優美はなんとか盛り上がろうと、乾杯の音頭を取りました。

「じゃあ、二人のドツボからの脱出のスタートということで、がんばーい」

亜子の微笑みは非難がましく歪み、自分の声が重なって優美は胃が縮むような気がしましたが、そのまま引っ込みがつかず、硬直した笑顔のまま特に飲みたくもないワインを生唾と一緒に飲み込みました。亜子はパスタを三本くらいずつ苦しそうにすすりながら、美味いね、と言いました。

「でね、聞いてよ」

この際優美は単刀直入に行くことにしました。自分の可哀相な話を聞けば、亜子の憂鬱も少しは紛れるかもしれませんが。亜子は先ほどこら言うとおりに聞きたくないのですが、正面切ってこられたので断ることもできず。これも滞在経費と諦めることにしました。

「他に好きな子ができたっていうのよ」

亜子はへー、と思いました。急激に優美の目が潤んで唇を噛みだしたので、慌ててその皮肉な心情を引っ込みました。

優美は大きなため息をひとつつきました。二十代に散々優美の痴

情騒ぎの独白を聞かされ続けた亜子は、確かに今回の優美は違う、なにか真摯さがあると思いました。こいつの失恋は今までこの真摯さが欠けていたから、聞いててアホらしかったんだ、と合点がいました。

「それって、ひどくない？ 私、今まで男の人とうまくいかなかったことなんていくらでもあるけど、他に好きな人ができたなんて言われたこと一度もないよ。そんな裏切りを平気で口にできるなんて、ひととして信じられないよ。そんな男の人、今までひとりもいなかった」

「その女の子と、もうつきあってるんだって？」

「そうだって、言ってた」

男の前ではぎゃあぎゃあ泣く優美ですが、その顛末を話すときに目を潤ませることは皆無でした。話すことに夢中で興奮しきっているというのが、いつもの優美でした。亜子は同じ逆境にある人間として、初めて優美に同情と共感を感じました。

「でも、多分嘘だと思う。単に私のことがイヤになって、いろいろ説明するのが面倒くさいから、他に女ができたって言っただけだと思う。だって、次にいつ会えるの？ って聞いたら返事がなくて、何で返事がないのか、ってメールしたらその返事だったんだよ。唐突すぎるよ」

亜子はいかにもありそうな話だと思いました。

「私のことがイヤならイヤでいいのよ。でもそう言えばいいじゃない。それを他に好きな子ができたからってバツサリ。私がどう感じるかなんて、どうでもいいんだよね。冷酷だよ。嘘なら嘘で、もうちょっと上手につけばいいのに。私が今までつきあってきたひとに、そんな冷たいひとは一人もいなかったよ。みんな私にイライラしても、それを説明してくれたし、怒っているのをストレートにぶつけてくれたもん」

説明するのが面倒くさいからって、自分でわかってんじゃない、と亜子は思いましたが、

「口下手なひとなんじゃないの？」

「そうかもしれない。一緒にいてもつまんないし。バカなのよ」
バカにバカって言われてるよ、と亜子は心中笑いました。

「気持ちをうまく説明できないし、する必要も感じないひとはいるよ。特に男のひとは多いんじゃない？」

「でも私の今までの彼にはいなかったなあ。みんな私より頭がよくて、口が達者だったもん。やっぱり体育会系ってバカなんだね。脳味噌が筋肉っていうもんね」

亜子はこうしてバカ呼ばわりされる、その体育会系らしい男のことを特にひどいとは思いませんでした。

《話そのものがあまりにありふれていて、かつくだらない。世の中のすべての恋愛がくだらないとは思わないけど、くだらない恋愛が多すぎる。優美は「今までこんなひとはいなかった」を連呼して、新規の仕打ちのようなことを言うけれど、他に女ができたのが本当にしる嘘にしる、そうやって関係を切るのはごくありふれた話。むしろあれだけ数々の男ともめて、そういうことが今まで一度もなかったことのほうが不思議》。

今までの亜子なら、そういう優美を、

「自分の都合ばかり押しつけて相手を悪く言うのは見苦しい。私はその男の人が特にひどいとは思わない」

とかなんとか言って諫めたはずです。むしろそういう亜子を優美が求めているのだと、私は考えています。でも今の亜子は違います。亜子を失業に追い込んだ上司を優美が、

「そっくりのはある話だし、そのひとも立場や言い分があるんだから。私はその上司が特にひどいとは思わない」

などと言ったら、優美との絶縁は免れないと思いました。絶縁どころか、《逆に優美を恨んで復讐してやりたくなる》。

《亜子の失業のいきさつを知ったところで、優美がそんなことを言うタイプじゃないのは亜子も知ってるでしょう。前のめりになってひどいね、その上司、って言うに決まっているよ。よく話を聞かな

くてもそうするのが優美じゃない》

《わかつているけど。でも今の私は、万が一にでもそんなことを言われたらって考えるだけで怖い。バカは気まぐれという予測不能な飛び道具を持っている》

結局亜子につられるように優美も食事が進まなくなり、残りのフルーツサラダは冷蔵庫に入れ、捨てるのはもったいないと、亜子はパスタにもラップをかけました。亜子は使った食器を洗うのはやらせてくれ、と申し出ました。

《食器を洗うとか、そういう仕事があるのは、逆にありがたいことで、なんとか立っていられる気がしてくる》。

この文面を見たとき、私は後ろめたいような、苦しい心持になりました。優美のその日のメールは《あんな亜子を見たことがない》で締めくくられていました。

五 元彼自慢はいけないか？

石川さゆりの「天城越え」で有名な浄蓮の滝を見に行こうとか、小室山公園でロープウェイに乗ろうとか、海女屋にお寿司を食べに行こうとか、ランチはオーベルジュ・ルタンのフレンチにしようとか、優美は亜子が来る前から考えていたいろいろな提案をしました。が、亜子は生返事をするばかりでした。ただ城ヶ崎の吊り橋を渡りに行こうと言ったときには、吊り橋、とつぶやいていましたが、それだけでした。

「じゃあ、今日なにをするの？」

亜子が伊豆に来て四日目。とても天気の良い日で、優美は怒っているようにすら見えました。亜子は遠出やレストランといった、どこか改まった別の場所に行くことを考えると、ずしりと気が重くなり、膀胱炎にも似た頻尿の症状が出るので、近場の海岸におにぎりを持って出かけることで妥協しました。歩いて二十分くらいのことですが、亜子が途中自分の身体に何が起こるか不安だと言い出して、車で行くことにしました。

お昼過ぎに別荘街を出ると、下り車線はわりに詰まっていました。「そうか、三連休初日だ」

亜子の目には車の列が、世の中のまっとうな流れそのものに見え、そこから自分のはじき出されたのを改めて感じました。優美がそんなことをわざわざ口に出して言うのは、自分を故意に傷つけようとして言っているのではないかとすら思えてきました。

《優美には昔から、面と向かって非難されないのをいいことに、臆面もなく嫌味を言う下品なところがある》

別荘に最寄りの浜はそれほど広くなく、もう九月半ばということもあって、浜で寝転ぶカップル、砂遊びをする家族連れ、波間を漂うサーファーたちはが穏やかに点在していました。二人は砂浜にビーチシートを広げ、お茶を入れた水筒と食べ物と並べました。

「私、優美は別荘ですつと仕事するのかと思ってた」

亜子は放っておかれると思ったからこそ、伊豆に来ることにしたそうです。

「亜子が来たときくらいは、いろいろして歓迎しようと思って」

優美はいつものように即席の言い訳をしました。二人の間の空気は、明らかに棘を孕んでいました。

「亜子はこれから就職活動どうするの？」

優美は亜子が伊豆にどれくらいいるつもりなのか知りたくて聞いてみました。

「私さあ、履歴書ではんばん落とされてさ。何通履歴書書いたかわらないよ。いちいち手書きで書かなきゃいけないなんて、バカみたい。でもその中のひとつの法律事務所は最後の面接に残ったのね。三度目の面接は、私ともうひとり、二十代っぽい女の子の二人だけだった。履歴書書いて最初に面接してから、最終面接まで一ヶ月以上かかってるんだよ。で、そのあと結局電話は来なくて、数日経ってから履歴書が返送されてきた。そしたら私、急にすごく不安になって、一人暮らしの家賃なんて払ってる場合じゃないなって思ってた。実家に帰ることにしたんだ」

答えになってない、と優美は思いながら、

「私も、彼とそういう感じになってから、すごい待たされて、ひっぱられて、それで振られたから、キツかったなあ」

と、自分の失恋について話すチャンスをつかんだ、とは思いました。

彼と優美の出会いはまたしても合コンでした。優美はそのとき前の彼氏と別れて半月ほど経過していました。このときも別れたくないと電話口で泣きわめきましたが、実際に半月経ってみると、心身ともにすっきりしていました。

その合コンの男性陣は、日本を代表するメガ商社のラグビー部の仲間で、後輩二人とその先輩でした。後輩二人は優美より少し下で三十代前半、先輩は四十を過ぎたばかりとのことでした。三人とも

独身で、離婚歴もなし。先に来ていた幹事の後輩は、まだ姿を現していない先輩を褒めちぎりました。先輩は高校大学とラグビーで全国大会に出場し、選抜メンバーにも選ばれ、その他に興味はバイク会社でも出世コースを驍進中。モテて当然のひとなんだけれど、忙しいのでなかなか女性と仲良くなる暇もない。今日もどうせダメだろうと思って声をかけたところ、遅れてなら来られるとの返事だった、とのこと。

優美はもとも学歴とか収入とか容姿で男性を判断することがなく、すでにその場にいた後輩のうちのひとりを入っていました。だから遅れて来る「先輩」にそれほど興味はありませんでした。優美の男選びのポイントは、いかに気分よく自分を女扱いしてくれる男性かどうか、直接的にも間接的にもきちんと女の喜びを与えてくれるかどうか、というところにあつた気がします。改めてこう書くと、ホスト選びの基準みたいですが。

ところが遅れて現れた先輩は、後輩二人と充分同年代に見える若々しさでした。そして優美たち五人が待つテーブルをみつけるなり、女性三人を一瞥して、優美で視線を止めました。優美が少し視線をそらすと、彼も我に返ったように自分の後輩に視線を向けましたが、また優美に一瞥を投げました。

優美はこういうことに慣れていましたが、それにしてもあまりなわかりやすさでした。亜子は話を聞いて、《さすがバカ同士、単純》と思ったそうです。優美は、今のところまだ自分にこれといった関心のしるしを見せないその後輩より、さつそく自分という「女」に目を向けてくれた先輩に傾いていました。合コンの最中、先輩はそれほど露骨に優美に話しかけることはありませんでした。というより皆無で、女性三人誰にも特に話しかけませんでした。視線さえ口クに向けませんでした。後輩二人が先輩と女性陣三人、誰一人漏れることなく話を振って、わきあいあいと楽しく、その店での時間は過ぎていきました。

その日はみんな仕事終わりで先輩が遅れてきたこともあり、最初

の店で解散となりました。地下の店から細い階段で地上へ上がって
くると、先輩は優美の背中をちょんちょん、と指で叩いて、

「あの、メアド」

と言いました。

「でね、彼が来る前、その後輩のひとつが、『先輩が来れば、とり
あえず女の子は納得してくれるでしょ。美味しいところ全部持つて
かれちゃうんだけどね』ってゆつてたくらいなの。彼、かつこいい
んだ、本当に。一緒に歩いていると、よくカップルの女の子が彼の
こと見てたもん。私、初めてああいう『典型的なひと』を好きにな
ったんだよね」

その口調は幸福感に満ち、現在の恋人について語る女のそれでした。
つい先日、人非人と罵った相手を、今度は手のひらを返したよ
うに、嬉しそうに自慢するというのも優美らしければ、そんな話を
失業中で脳内に暗雲垂れ込めている亜子にしてみまうというのも、
優美らしい無邪気さというか無神経さでした。

「そんな“典型的な”ひとが、四十過ぎて独身ってことは、何かあ
るって思わなかったの？」

優美の口から出たのはやはり冷や水でした。

「それは、だって、私だって特になにか決めてずっと独身なわけじ
やないんだから、彼も同じなんだろうな、って思ったし。運命のひ
とに、まだ出会っていないだけなんだって」。

「男と女は違うよ。忙しいのも理由にならない。条件揃った男が四
十過ぎて離婚経験すらないとしたら、結婚はもちろん、特定の彼女
も作りたくないとか、なにかあるに決まってるじゃん。そんな一流
商社にいたら、周りの仲間だって大方結婚して子供がいたりするん
だよ？ 独身だとしてもバツイチだったりするわけじゃない。その
中で独身貫いているってことは、要はひとりの女の人ときちんと向
き合えるタイプじゃないんだよ。つきあっている子がいても、うつ
とおしくなったらプロセス踏まないでバツサリ切るのに何の抵抗も

感じないひとでも、全然不思議じゃないけど」

亜子がそうに言い放つと、優美は緊張と一緒に我に返り、
「そうだよな。そんな男だから四十過ぎても独身なんだね」

と、亜子の言葉に同意しました。高校時代からずっとそうしてきたように。

夕方に浜を引き上げて別荘に戻ると、亜子は疲れて食欲もないと言って、翌日までずっと部屋のベッドに横になっていました。

六 どこから自己中心的といわれるか？

三連休の最終日になる月曜日の夜九時頃、また優美から、《今、電話で話せる？》とメールが来ました。大丈夫だよ、と返信すると、いつも通り早速かかってきました。

「三連休、楽しく過ごしたあ〜？」

日曜日に夫につきあって中山に競馬を見に行って、食事して帰ってきただけ、と言うと、

「そうなんだあ。相変わらずアキちゃん仲間いいねえ」

余談ですが、夫は優美の元カレの友人で、私は優美のおかげで夫と知り合えたことになります。

「羨ましい。私、東京に帰ろうかな」

いつものことですが、突然の話題転換に私は驚きました。

「どうして、急に？」

「だって、やっぱりこっちで仕事ってやりにくいんだよね。いろいろ資料とか置いてきちゃったし」

こういう見え透いた言い訳を堂々と言えるのが、他の人にはない優美の度胸です。

「亜子はなんて？」

「まだ言っていない」

優美はこの電話の本題であるところの亜子について、どっと話し始めました。この三日間、ずっと沈鬱な表情で、一緒に買い物に行く以外には外にも出ず、部屋でじっとしているか、居間のテレビを虚ろにみているか。そのテレビも幼児虐待などの凶悪事件や政治でもめているニュース、若い女性タレントが嬌声を上げるバラエティ番組などになると、突如としてチャンネルを替えるか消す。

「私は別にテレビ大して見たくないからいいんだけど」

どこか散歩でも行こうと言うと、疲れているし気分も重くて、とてもそんな気になれない、と言われ、昨日は早く寝たみたいだけど、

聞くと、ベッドにいる時間は長いが、ほとんど眠れないとのこと。食欲もあまりないとかで、食事も不規則に冷蔵庫にあるものや優美の作った残り物をつまむだけ。

「いつから私の人生、こんなふうにおかしくなっちゃったんだろう。今までは失恋しても、慰めてくれるひとが何人もそばにいたのに。彼氏がいよいよといまいと、友達と買い物に出かけたり、映画を見に行ったり、ドライブしたり、飲みに行ったり、旅行に行ったり、遊びの予定が途切れなくあって、いろんなひとと連絡を取って、楽しく過ごしていたのに。私の生活はそういうものだって、思ってた。こんなふうに毎日を過ごすことになるなんて、少し前には考えられなかった」

いつからこんなことになってしまったのだろう、とふと考え出して、

「やっぱり彼とのことが始ってから、全てが狂いだしたんだよね」と言い出しました。

合コンで彼からメアドを聞いてきたのに、そのあとメールは全然来ませんでした。こういうことも今まで全くないわけではないのですが、今回に限って優美は妙に待ってしまいました。自分から男性にメールを送って、反応をみたことは何度もあります。返事が来ないということは今まで一度もありませんが、おざなりな挨拶的内容だったり、それなりに薄い反応というのはいくつもありました。そんなとき優美は特に傷つくでもなく、ご縁がなかったものと忘れました。実に健康的でした。優美は彼とメアドを交換していたので、自分からメールすることもできたのですが、向こうから来るものと思ひ込んでいたので、こちらか送るのはなんとなく憚られました。これも、こと恋愛については迷っている暇があつたら即実行の優美には珍しいことです。結局待ちきれず、合コンから四日後、精神衛生上よくないと、自分からメールしてみました。これ以上間が空くと、不自然な真剣さが乗ってしまうような気がしました。気軽に探

りを入れる期間はすでに過ぎている気がするくらいです。優美はいつもと違って、「意を決して」メールを試してみました。するとその日のうちに、

《メールしようと思っていただけ、忙しくて後回しになってしまった。食事に誘おうと思っていたところだった》

との返信が来て、優美は深い喜びを感じました。今まで男の人から最初のメールをもらって、こんなに素直に嬉しいと思ったのは初めてじゃないかというくらいでした。メールの末尾に「by x x」と彼の名字が入っているのが変わっているな、と奇妙な感じがしましたが、そんなことより嬉しさのほうがはるかに勝っていました。

しかし具体的な食事の日取りを決めるメールはまた来ません。そもそも優美は待つのが嫌いな女です。待たされるというのは相手にそれほど気がない証拠であり、待つというのは、すでに関係において下位に立つことであり、負けでした。優美は彼から来た、たった一通のメールの短い文面を何度も見つめて、これは社交辞令なのかと考え込み、こんな無駄なことはないと思いました。この男と縁がないなら、早々に結果を出さなくては、次に移ることもできません。優美はいつ食事ができるかとメールしてみました。その気がなければ、適当に断ってくるでしょう。忙しいとか何とか。するとなんのかわりとりがあつて、合コンから一カ月後の金曜日に初デートの段取りとなりました。優美にとっては、驚くべき気の長さを強いられる相手でした。

相手がこうなので、優美はあまり期待していませんでしたが、いざ日にちが決まると彼は「素敵」でした。待ち合わせ場所から時間から具体的に指示してきて、表参道のブラジル料理を予約し、そのあとは行きつけのショットバーに連れて行ってくれました。ただ二軒はしごして、話が盛り上がる、ということは残念ながらありませんでした。優美はラグビーにまったく興味がなく、ルールはもちろん知らないし、車はともかくバイクになると同様でした。彼も優美のデザインの仕事とか、ニューヨーク滞在の話にさして興味はない

ようでした。優美は友人夫婦の結婚、離婚のいきさつなどをネタにしてみました。食いつきはあまりよくありませんでした。彼はうん、うん、そうなんだ、と相槌を打つのがほとんどで、自分から話題を提供することはありませんでした。優美について聞いてくることもありません。優美は盛り上げようと、いつになく一生懸命になりましたが、空回り感ほぐえませんでした。彼はつまらなそうには見えませんが、それほど楽しそうにもみえませんでした。終電がなくなるからとバーを出ると、彼はタクシーを拾って駅に向かおうとしました。優美は駅まで並んで歩きながらおしゃべりしたほうが椅子に座って改まってというより、もっと自然に仲良くなれる気がしましたが、それも却下。運転手に気を使わせるような出来事も全くなく、駅でタクシーを降りると、別々のホームに足を向けました。

優美は疲れて家に帰りました。振られたな、といっになく残念な気持ちになりました。初デートがつまらなくて「結果」が出てしまうことは、今までだって何度もあります。でもそれは相手に何か欠落しているか過剰であるか、とにかく二人に縁がないのであって次の男に備えれば済むだけの話。初デートが盛り上がりなかったことをこんなに残念に思うのは、初めてのようないな感じがしました。おごってもらったお礼は別れ際に言いました。その上お礼のメールを送るのに不自然はなにもありませんが、なにか未練がましい行為のようないな感じがしました。彼は優美に対してどうこうではなく、女の子にすべきからくそういう対応をするべきだ、という自分のルールを守っただけだと思えました。でもお礼のメールもしない礼儀知らずというのはどうだろう。でもそのメールに返信が来るのかどうか待つのもかなり辛い、などなど。そうしてメールを送るかどうか迷って携帯を握り締めていると、当の彼からメールが来ました。

「今日は遅くまでつきあってくれてありがとう」

優美は天にも登る高揚感に身体の間々まで満たされました。優美は彼と結婚する決意を固めました。またしても末尾に「by」の但し書きがありました。これは正式につきあうことになったら、

すぐに、

「メアドが登録してあるんだから、だいたいのひとはこんななくてもわかるでしょ」

と教えてあげようと思いました。

「今まで男の人が私に気があることを示して、私もそのひとに好意をもって、うまくいかなかったことはない。当たり前だよ、お互い気に入ってるんだから。だから今回もって思うの当たり前でしょ？　どうしてこのひとが最後の男性だと思ったときに、こんな目に遭わなくちゃならないんだろう」

優美の話に言いたいことはありませんでしたが、上手い言い方が見つからなかったので、黙って聞くことにしました。

「今までの男は、二週間くらい前に別れても三年くらい前に別れた気がしていた。彼とは三ヶ月くらい前に最後の連絡を取ったのに、まだ終わった気がしない」

私は気になっていることを聞きました。

「それで東京に戻ってくるの？」

「私ね、亜子があんまり暗い顔してるから、元気出しなよ、亜子みたいに優秀なひとはいずれ仕事みつかるよ、って慰めてみたのよ。そしたら、今の私にはそういう無責任な慰めの言葉が一番堪えるって、怒られてさ。どうしていいか、わからないよ。どうしたらいいと思う？」

私は返事に困りました。自分にも優美にも怒りを感じました。

「優美が、伊豆にいるのは仕事に差し支えがある、っていうなら仕方ないと思う。でも、そもそも亜子を伊豆に誘ったらって提案したのは私だから、二人に申し訳ないことになったね」

私の語気に重さを察知したのでしょう。優美の言葉も勢いを失いました。

「そりゃ、まあ、こつちで全然仕事になんないわけじゃないんだけど。でも、亜子は何を話すでもないから、どうしていいかわらない

んだよね」

これもわかります。同じ慰めるなら、亜子を慰めるより優美を慰めるほうが、はるかに簡単です。おまけに優美は慰められ慣れているだけで、ひとを慰めるのはまるで不得手。結局二十代の頃とまるで同じ。私は何を言える立場でもない、黙るだけです。

「そうだね。昔、優美が話を聞いて欲しいってよく言ってたとき、亜子は私よりずっと親身になって優美の話を聞いていたけど、なにも話さない相手には対応できないよね」

結局こんな嫌味しか言えない自分が嫌になりました。

「そうだよ。昔、私、亜子に散々話を聞いてもらってたよね」

優美は慌てて言葉をつなぎましたが、私は電話を切りたくて仕方ありませんでした。

「私ね、今『愛される女性になる法則』っていう本を読み終わったところなの。その本にね、ひとから癒されたいと思ったら、まず自分が周りのひとを癒していきなさい、ってあったの」

なるほど真理だとは思いますが、優美が慌てた口調で言う不安が増すばかりでした。

結局このあと、いつ東京に帰るといふ話は出ず、男性に愛される女性は自律しているとか、その恋愛指南書にあったらしい、ありがたいお言葉についての話で終わりました。

七 性的なことにとどこまでひとは縛られるか？

亜子は別荘に来る前から、夜九時には布団に入る生活を続けていました。なにも考えたくないのです、とにかく眠りたいのですが、寝ようとしても眠れません。時々ふつと浅い眠りに落ちることはありますが、途切れ途切れに意識が戻り、だいたい朝四時には目が冴えて、うとうとすることもできなくなりました。そこでベッドでじつと目を開け、自分の人生の暗澹たる行く末に思いを馳せてから、八時頃居間に降りて優美と顔を合わせました。ベッドにいる時間は長いのですが、寝た気はしないので頭はぼんやりしています。口を開けば後ろ向きな言葉が出そうなので黙っています。そんな自分を優美が疎ましく思い始めているのは知っていました。あまり同じ部屋にいないほうがいいとは思いますが、ずっと部屋にこもっているのも、いい顔されそうにありませんでした。

「ひとの別荘に来て、一緒に遊んでくれないどころか陰気を振りまいている」

と、優美は恨めしいため息を吐いているような気がしました。でもそれで優美を責める権利はないと思いました。どうせ人生そのものから見放された私なのだから、もうどうでもいい、どうでもいい、思わなくてはいけないと亜子の思考は流れていきました。そして朝日の試練が過ぎ、日中の厳しさに耐えると、人生の闇そのもののような夜の闇が訪れます。伊豆の別荘街の静かな夜、亜子は心細くベッドに身体を横たえて、ぼんやりと目を開いていました。

すると十一時頃、ノックの音とともに、「亜子、起きてる？」と優美の声がしました。改まってなんだろう、ここから出て行って欲しいと言われるのだろうか。今逃げたところで後で言われるだけなので、亜子は、起きてるよと応えてベッドから出ました。ドアが開いて、パジャマを着た優美が立っていました。寝ていたかと聞かれたので、ウトウトしていた、と応えたら、じゃあ一緒に寝よう、と

言われました。

亜子はびっくりしました。この部屋のベッドはセミダブルなので、女性なら二人で寝ることは可能です。でも三十六歳の女が二人、同じベッドで寝るといふのはどうでしょう。別の部屋にベッドがあるのに。一人寝に徹底的に慣れている亜子が返事に詰まっていると、優美は自分の部屋に戻り、掛け布団と枕を持ってきて、亜子のベッドに置くと、寝ようよ、と明るい声で誘いました。

亜子の全身は緊張し、最初に寝ていた位置より端に寄って布団に入りました。すると優美はキャツキヤと寄り添ってきました。避けるのもおかしいと思ったので、そのまましていると、二人の肩の辺りがぴったりと密着しました。優美は三十六歳とはいえ、そういうことをしてもあまり奇妙な感じはしない、かわいらしさの持ち主ではありません。でも亜子は、自分は違う、と恐れました。亜子はゾクゾクと奇妙な感覚に襲われました。それは認めたくないのですが、官能に通じていました。亜子はわが身の危険を、優美という「自由なひと」に自分が乱されていく恐怖を感じました。性的なことに限らず、マイノリティの存在は許しても、自ら所属することはできないのが自分だと、つくづく思いました。失業者であることだって、そうです。

優美はそんな亜子の煩悶をよそに、肩をくつつける体勢がなんとなく寝にくかったので、すぐに普通に仰向けになりました。

「ねえ、なんで急に会社辞めちゃったの？」

セクシュアルな問題から突然真逆の方向にひっぱられて、亜子はふと緊張を解きました。部屋には月明かりと木々の心地良い湿り気が満ちていました。その寝室の同じベッドに優美と肩を並べ、同じ天井を見上げていると、亜子の身体から漠然と世間全体を敵に回していたような、防御の力みが抜けていきました。ここは東京ではなく、生活から切り離された全くの別世界なのだと改めて感じました。

「上司とうまくいなくてね」

「ふうん。そういうひと、世の中にたくさんいそうだけど、辞める

「ほどだったの？」

「そうねえ。手短に話すの難しいんだけど。四月に人事異動があった、そのとき私の仕事が全部後輩に突然引き継がれて、私の仕事が無くなったの」

「うつそ。そんなことあるの？」

「あつたから、その日のうちに会社辞めたよ」

亜子は二十人ほどの弁護士を抱える法律事務所で所長秘書を十年以上務めていましたが、新所長と巧く折り合わなかったようでした。新所長は前所長の娘婿で、前職は副所長でした。

「自分に甘くて他人に厳しいの典型でさ。うつ病だか神経症だかなんだか知らないけど、遅刻早退欠勤自由。他の社員に挨拶も口々になくて。でも私はやつの上司っていう立場を尊重して、返されもしないのに挨拶もしたし、仕事もしてたのよ。やつをミスを私のせいにされたときだって我慢したし。それが四月になったら私と後輩の机の位置を変えろっていうのよ。抗議しに行ったら、なんて言っただと思う？ 『キミと一緒にの部屋にいと、僕は呼吸できない』だつて」

「ひどい、そんなの訴えればいいのに」

「訴えるなんて簡単に言うけど、どこに行けばいいの？ どのくらい時間がかかって、どのくらい経費がかかるの？ どのくらいエネルギー費やせばいいの？ その間に私の人生って、どうなってるの？」

亜子はずっと抱えていた苛立ち、やるせなさをようやく吐き出す場を得ました。

「所長には娘さんが一人しかなくて、もともと自分のところの若い弁護士と結婚させて、事務所を継がせるつもりだったのよ。聞いた話なんだけど、昔は三ヶ月に一回、未婚の若い弁護士は所長の家を集められて、食事会という名のお披露目会があつたんだって」

「童話にある、お城の舞踏会みたいだね。お姫様のお相手選び」

「そうそう。あんたの家だってそういうのありそうじゃん」

「冗談でしょ。父親がらみで結婚なんて嫌だよ」

「でも所長の娘さんは、お父さんの希望通りその中から選んだのよ」
「素直〜エラ〜い」

「素直でもお姫様だから、見た目で選んだらしいのね。その中で一番かつこよかったのがその副所長だったんだって」

「へえ、かつこいいの？」

優美は少し色めき立ちました。

「全然。中年太りで二重アゴ。見る影もなし。いつも不機嫌そうデエバってて」

「ハゲてはいないの？」

「ハゲてはいなかったねえ、どっちでも関係ないけど。そんな中年デブは次男で、当時はお姫様の寵愛を得て逆玉に乗る気満々だったらしいの。で、両家めでたく合意。そこまでは順調だったんだけど、後継者選びとしては結局失敗だったのね。当然所長は後継者として育てようとしたんだけど、デブは取り入る気はあっても育てられたくはなかったんでしょ。最初はリーダーかくあるべし、っていうのを細かく指導したみたいだけど、そのストレスで美男の婿はブクブク太り、神経科通院が始ったらしいわ。私が入社したときには、すっかりお腹が出て土色の弛んだ顔してたからね。んで、娘さんが父親である所長を責めたらしい。そしたら遅刻早退欠勤も病気を理由に彼だけ自由になっちゃってさ。黙認ってやつよ。他の社員は一日有給とるのも遠慮しながらなのに。机の引き出しに精神安定剤みたいなもの入れててさ、これみよがしに飲むわけ。若い時にはかつこよかった、なんていうのも私には信じられないけど、リーダーとしての器を見込まれて選ばれたわけじゃないってことで、その話に信憑性を感じるよ。そんな男でもいちおう上司だし、病気だからと思っ
て何年も我慢した結果これよ？ 馬鹿みたい」

人生って、本当にバカバカしい、という言葉は亜子は飲み込みました。優美の脳裏には、亜子が副所長の所業に不満を持っているときの顔や態度がありありと浮かんできました。

「世の中に事件とはいわないまでも、常識とか良識の通用しない矛盾に人生をぶち壊しにされるひとはいる。歴史的にみても今の世の中見回しても、当たり前前のものとして大勢いる。それは知ってた。でもそれが自分になるとは、思ってもみなかった」

「私たち似てるねえ」

「どこが」

呑気な失恋と一緒にされたくないという思いから、亜子は言いました。

「私は筋肉質のバカに、亜子は神経質のデブに闇討ちされて、深手を負ったんだよ」

あはは、と亜子は久しぶりに自然に笑いました。うまいね、あんた。優美もつられて笑いましたが、一息つくと、しみじみと言いました。

「私たちは二人とも、これまで自分こうだと思っていた人生に突然捨てられたんだよ。そしてそのことに二人とも、未だに納得にできていない」

《優美は昔から、極まれに鋭いことって、ドキツとさせる》。

亜子は優美と過ごした時間の奥行きに思いを馳せました。

結局その日亜子は朝七時まで一度も目覚めることなく、優美の寝息の隣で深く眠りました。それは忘れていた快眠でした。

八 ガラにもないことをすると、ロクなことにならないか？

それから数日、二人は別々に寝ました。ある朝起きると、亜子は生理になっていました。優美に生理用品をわけてもらえないかと聞くと、優美も全く用意がないとのことと、慌てて優美がひとり車を走らせてナプキンを買に行きました。その間亜子はトイレの便座に座って待っていました。九月下旬とはいえ日中は半袖で過ごせる暑い日で、亜子は寒い季節におしりを出して待機することにならなくてよかったと思いました。優美はナプキンを買ってくると、トイレのドアの前に置きノックして、

「買ってきたよ」

と言うとその場を離れました。

幸いシーツは無事で、亜子はパジャマと下着を洗いました。終わって居間に行くと、優美はパソコンを開いてゲームをしていました。

「ごめんね。ついうっかりして、そっちの用意を全く忘れてた」

「全然気にしないで。私ももう随分生理になっていなくて、こっちで用意しておくの忘れてたよ」

「生理になつてないって、どういうこと？」

「私、失恋のショックで、生理が止まっちゃって。もう三ヶ月ないんだよね。私わりと正確なんだけど、今まで男と別れてもそんなこと一度もなかったから、そのことがまたショックでさ。それでなんか、がつくりきちゃって。東京で友達とわいわいやりながら生活するのに限界感じて、こっちに来ることにしたんだよね」

「え？ それって、妊娠とかじゃないの？」

「ううん、それはない」

「妊娠検査薬とか、いちおうやってみたの？」

「やるわけないじゃん。だって私、この半年セックスしてないもん」

「筋肉質のバカ」からデート後のメールが来て、人生初めて結婚

を決意した優美ですが、その後メールはまた来ませんでした。優美にとって、これまで男は楽しくなくてはならない人生の必需品でした。仕事やらで直接会ったのがさしあたって無理なら、メールや電話といった間接的手段でもいいので、常にそばに感じられなくてはならないものでした。だから結婚願望はありませんでした。親戚づきあいや嫁姑など、様々な恋愛外の義務と気遣いを伴う上に、同じ屋根の下で暮らして逃げ場もないなんてものには、まるで惹かれませんでした。関係に限界が来ても、気楽に解消はできません。でも彼とは、一つ屋根の下で二人で生活したい、と思いました。結婚による様々な社会的義務も背負う気になりました。

これはと思った男性をデートに誘うことなんてなんでもない優美が、結婚を考えてしまったせいでしょうか、「こういうことは男に言わせなくてはいけない」という古典的恋愛セオリーにこだわり始めました。最初のデートはこちらから誘ったのだから、二回目以降は彼からなくてはなりません。しかし何もありませんでした。痺れを切らして、

《今週末は天気がよさそうで、ラグビー日和ですね》

などと探りのメールを送ったりすると、

《今週末は土曜日は出勤で、日曜はバイク仲間と長野までツーリング。三人しかいないけどね》

などとその日のうちに返事は来ますが、誘いの内容はありません。普段の優美なら、ここで清々しく撤退しているはずでした。相手が忙しいかなんて関係ありません。その時点でそもそも優美の恋人たる資格はないのです。それが今回に限っては、相手は忙しい商社マンだから、我慢しなくちゃいけない、結婚したって放って置かれるのだから、慣れていかなくても、と踏みとどまってしまいました。返事が来ている時点で、脈がないわけではないと思いました。さらに数日が経ち、男性の意思によってことを運ぶという最初の決意はなかったことになりました。今度いつ会えるかとメールして、デートの日取りが返信されてきました。出会った日から二度目のデ

ートまで二ヶ月。気が遠くなる間隔でした。一通一通のメールに返信が届く間すら、優美の女心は息苦しさに耐え忍んでいました。

その二度目のデート日。二人で山梨方面にドライブに行く予定でした。優美が男に不満をもつのは当たり前のことなのですが、それを相手にストレートにぶつけられるのが恋人の権利だと思っています。相手は謝るか反省するか、適当に受け流すか、とにかく優美が恋人にたくさん会いたいという想いを受け止めなくてはなりません。ところが彼は寝坊して、優美の携帯で起きる始末でした。優美はがっかりして遅れてくる彼を待ちました。もうデートしてくれないことへの不満をぶつけるどころではありません。それほど申し訳ないさそうでもない彼に会うと、ひどい、とおどける程度にとどめてはなりません。男の前でこんなにのびのびできないのは、処女喪失以来初めてでした。山梨方面へのドライブは却下となり、千葉方面をドライブして食事をして帰ってきました。その間もキスどころか手をつないだりといったロマンチックなことは一切なし。失意にうなだれて家に帰ると、あとから家に帰りついた彼からメールが来ました。今日は遅刻してごめんね、といった内容でした。優美は特に嬉しいとは思いませんでした。

行動する恋多き女の優美に「どうするべきか」と考える時間ばかりが増えていきました。相変わらずご機嫌伺いメールを三日に一度ほど送って返事をもらいますが、それだけ。しかし三週間後、三度目のデートの誘いが向こうから来ました。優美は嬉しいというより、ほっとしました。

三度目のデートはまた一カ月後でした。汐留の串焼き屋で食事をして、それなりに楽しく過ごして別れました。そしてまたしても何も起こりません。彼は結婚相手なので、すぐセックスしたりしないほうがいいとは思っていました。もし向こうが性急になったら、段階を踏ませる意味で焦らすべきである、これから長い結婚生活ですつとセックスするのだから、飽きはなるべく先延ばしにしないでいけな

いけな

触れられたらどんなに高揚するだろう、彼の腕の中にあつたら、どんなに幸福な暖かさに満たされるだろう。まして、彼を自分の中に感じるときには。それを思うと、今までの数々の肉体的接触は、それはそれでよかったし、なくてはならないものだったけれど、安っぽいものには思えてきました。

しかし優美の入り乱れた思いをよそに、なにも起こりません。優美がこんなふうに考えながら関係を進めた相手は今まで一人もいません。三度目のデートのあとは、まったくメールが来ないようになりました。優美は焦りました。疲れ果てました。黙って彼との関係を忘れるには、時間が経ちすぎていました。優美は白黒はつきりつけないと息がつけないと思いました。この先がないならしないで構わない、そしたら次に移るだけ。今までそうしてきて、それで正解でした。今回もそれと同じはずです。優美は次にいつ会えるのかメールをしました。もし会えるなら、なにか目に見える形でステツプアップさせなくてはいけないと思いました。いつもその日のうちに来る返事が、そのときは来ませんでした。これは耐え難い、と翌日すぐになぜ返事が来ないのか、とメールしたところ、その返信が《他に好きな子ができた》でした。律儀に「by」で締めくくられていました。

「不思議なもんよねえ。寝てない男に振られて生理は止まるし、一度もその男の前で泣いたことのない男に振られて一番ダメージ受けるなんて」

亜子は、こういうことを淡々と話す優美はなんて強いのだろうと思いました。自分がもし同じ目にあつたら、ひとにこんなふうに話すことはできない。あけすけというのは品はないけれど、強さではあると思いました。

「大好きって思える男の人は今まで何人もいたし、同じ相手にすごいム力ついたことも同じくらいある。でも、こんなに深く苦しいことってなかった。おまけに、こんなに私に辛い思いを抱かせてお

きながら、それを聞くことすらしないなんて」

嬉しいことも悲しいことも、どんな激しい感情も頂点を迎えることはあっても、優美の中に長く留まることはありませんでした。優美は無意識的にも意識的にも自分をそう仕向けてきました。激しい感情が自分のなかに溜まって腐臭を放つ前に、陳腐な話にして外に吐き出さなくてはなりませんでした。そのために他人の感情が多少犠牲になっても、意に介そうとしませんでした。償いは別のことでいくらでもできるはず。そうして彼女の人生はいろいろあっても、軽やかで楽しいものであり続けるはずでした。しかし今回はマイナスの情念が彼女を捕らえて離れませんでした。優美は自由を失いました。

一方亜子は、もう随分長いこと、事を恋愛に限定しなくても、他人が深く自分に食い込んでくることがなかったことを思いました。すべてが社会人としてのつきあいの範囲内で起こることでした。多少嬉しかったり腹が立ったりすることはたくさんありましたが、全で一過的なもの。何かを強く他人にぶつけたり、ぶつけたいと思ったことはなく、他人のほうも深く優美の中に入ってくることはありませんでした。

「私も、あの神経質のデブは殺してやりたいと思った初めての人間だなあ。こういうのが殺意っていうんだ、って初めて体感した」

「ふうん、私は別に彼のことを殺したいとは思ってないな」

亜子はふと、元副所長に対する殺意の矛先が優美に向くのを感じました。どうしてこの女はこういうことが簡単に言えるのだろう。どうしていつも自分の話ばかりなんだろう。亜子は失業のいきさつを優美に話したことを後悔しました。

《よりによって優美に話すなんて、私もどうかしていた。悪い奴に弱みを握られたようなものだよ。優美の浅薄さは不治の病だつてことを、なぜ忘れてしまったんだろう》。

亜子が無表情で黙っていると、優美は言おうと思っていたことを思い出しました。

「あのさあ、ここに友達呼ばない？ 週末なら来られる人いるでしょ。それこそ智子とか誘ってみようよ。亜子の知り合いを呼んでもいいよ。私も友達呼ぶし。こんな静かなところに二人きりでいると、退屈じゃない。みんなでワイワイやれば、やなこと忘れて、亜子も私も元気になるよ」

亜子はひとに会いたくないから伊豆に来たのです。世の中の流れを感じたくなくて、静かな海への別荘街に来たのです。亜子にとって、無職で再就職の見通しもない独身の自分は「人生の落伍者」であって、そんな自分からすれば、平穩に日々を送る知り合いや友人は、何を言わなくても、存在だけで亜子を傷つけるものでした。そもそも、多くのひととワイワイやるのが苦痛だから伊豆に来たと言ったのは、ついさっきの優美です。

亜子はもう何を返答するのも考えるのも嫌になり、部屋に戻ると一日ほとんどドアを開けませんでした。

九 下手の考えより休むがかなりマシか？

天気の良い九月下旬の日曜日。優美はランニングをすることにしました。亜子は誘っても一緒にくるわけがないので、出かけることを告げて家を出発しました。身体を動かしていれば、失恋で受けた傷、そこから絶えず出る膿のことを一時忘れられる気がしました。むしろじつとしていると考えてしまふ、膿が自分の中に満ちてしまふ。考えるのって、本当によくないことだ、と亜子は思いました。走っていると風が心地よく身体をなで、自分の身体の躍動を感じました。海岸まで出て、一息つきました。いつもの小さな砂浜では、いつものようにカップルや家族連れが静かな景色を作っていました。優美は岩に腰をおろすと、私は一生一人なんだな、と心細くなりました。するとみるみるあの感覚が戻ってきました。

《なぜ私がこんな目に遭わなくちゃいけないんだろう。なんで一番好きな男を恨めしく思うなんて、つらい目に遭わなくちゃいけないんだろう。私、今までひとを恨んだことが一度もないんだって、この歳になって初めて知ったよ。ムカついたこととか嫌いなひととか、苦手なひとはいたけど、どれも恨むっていうのとは違う。心に残ってない。ひとを恨むのって辛いね。知らなかったよ。しかもその相手が私に一番の喜びを与えてくれるはずのひとっていうのはひどすぎる。私はこんなふうにひとを傷つけたこと一度もない気がするよ？ 実はそんなことないのかな？ 気づいていないだけなのかな？

亜子は前の会社の上司を恨んでるみたいだけど、もともと嫌いな相手を恨むのと、大好きな人を恨むようになるのと、どっちが正しいだろう？ 私は今までの恋愛の中で、ばれるような浮気は一度もしたことがないし、他に好きな男ができたからって男を振ったことも一度もない。関係はただ二人の間でダメになっていくだけ。つまり私は一方的に相手を手ひどく傷つけるようなことをしたことは一度もないんだよ。なのになんで今回に限って、こんな目に遭わなく

ちやいけないのか、ぜんぜんわからない。恋愛の神様がいるなら、絶対おかしい》

優美は一世一代の失恋を味わったあとでも、夜はよく眠れます。食事も美味しく食べられます。風が吹けばきもちいいと感じます。それぞれは今までと同じ喜びをもたらしてくれます。失恋の傷で損なわれることはありません。だからといって、受けた傷は大したことないということになるのでしょうか。息が詰まるような感覚が舞い戻ってきました。どうしてこんなひどい感覚に、一人で耐えなくてはならないのでしょうか。こんなにつらいのだから、それを受け止めてくれるよう友人に求めるのが、それほど罪深いことでしょうか。それが友人の役割ではないでしょうか。確かに今までその役割を優美が担った記憶はあまりありません。でもそれは友人たちが優美に求めなかったからで、優美が拒否したことはないはずです。むしろ頼って欲しいくらいというか、いろいろ話を聞きたいという欲求はいつもあります。優美は自分を飲み込みかけた、よろしくない波を振り切るように立ち上がると、また走り始めました。帰りは登りになるので少しきついのですが、早く家に帰ろうと思いました。帰って、吐き出さなくてはいけません。優美は常に重さを恐れました。そうしてひとは自らに足枷をつけていくものです。人生は軽やかでなくてはいけません。

一方亜子は、優美がいないので居間で遠慮なく後ろ向きになっていました。

《どうしてこんな目に遭わなくちゃならないのか理解できない。今まで真面目に地味に生きてきたのに、正直者がバカをみるのが世の中というものなんだね、きつと。学生のころは勉強に、社会人になつてからは仕事に、ひとより真面目に取り組んできたつもりなのに、なぜこんな境遇に陥れられなくちゃならないんだろう。もう馬鹿馬鹿しくて生きていたいとも思わないけれど、自殺してもあの世で救われるわけではないなんてことを宗教がらみではよく言うじゃないあの世なんてものがあるのかどうかも確認のしようがないのだけ

ど、そんな不確定さまで含めて、人生なんてやつかいなものを背負わされた不幸だけは間違いない。私という存在が溶けて消えて無くなってしまうたら一番嬉しいのに。会社の近くで通っていた馴染みのヨガスタジオの仲間との会話、そのあとの食事会、いきつけのレンタルビデオ店の素敵な店長と映画の話をするときめき、多少寂しかったけれど、自由で快適だった都内のマンションでの一人暮らし。私を満たしていたささやかな生活の輝きが、全てあの神経質のデブによって奪われた。所長は好きだし尊敬していたけれど、あのデブを後継者にし、私をこんな不遇に追い込む権利を与えてしまったことを考えれば、所長も許すわけにはいかない。』

そうしてテレビも点けず、静かな居間でひとりぼんやりしていると、ドアが開いて家主が帰ってきました。Ｔシャツにジャージ姿で、台所へ行くとコップに麦茶を入れて、テーブルを挟んだ向いに腰を下ろしました。

「あのさあ私、彼とは本当に、結婚して子供も生んで、義理の両親にも可愛がられるいい嫁になろうと思ったのよ。彼が仕事で忙しくても、一人で家を守ろうと思っていたのよ。子供なんて厄介なもの欲しいなんて今まで思ったことなかったのに、私が生んだ子供を喜ぶ彼を見たいと思った。今までこんなこと、一度もなかったのに、なんでそう思った唯一の恋がこんなふうに踏みにじられなくちゃいけないんだろう」

そう一気に言うつと優美はコップの麦茶を空けました。亜子は自分を取り戻すまで少し時間がかかりました。そしてまた思いました。この女はどうして自分の話ばかりできるのだろう。そんな話に他人が興味を持つと思うのだろう。

「相手あつてのことなのに、なんでそんなに一人で先走ったの？ちゃんとつきあいだしてもいないうちから」

「そりゃ、亜子の言うことはわかるけど。でもそう思っちゃったんだもん。しょうがないじゃん」

「一緒にいてそんなに楽しくなかったって、自分で言ってるじゃない

い。一緒にいて楽しいとかいう感覚って、だいたい相手と共有してるものじゃない？」

「そうかもしれないけど、でもこのひとが運命のひとだと思っちゃったんだもん」

《バカ過ぎる。バカであることより、バカのままで通用すると思っ
ていることが一番腹立たしい。ひとの話を聞くというのは、それな
りにエネルギーの要ることなのに、同じ話を何度も何度も。おまけ
に疑問を投げかけていながら、常に答えなんて求めていない。そん
なに真面目に聞くな、聞き流してくれれば充分だと思ってるのだろ
うか。それなら相手を間違えている。こっちは野垂れ死が待ってる
かもしれない人生なのに、なんで暴走失恋したボンクラ金持ち娘の
相手をさせられなくちゃならないんだろう。振られたことはいちお
う可哀相だと思う。理不尽だと思ってしまう気持ちも理解できない
ではない。でもこの女の口から恋なんて言葉が出ると、趣味の悪い
装飾を施したホコリまみれのガラクタ入れのことみたいだ》。

「恋とか言ってるけど、それって本当に恋なの？ 要はアテが外れ
てショックなだけじゃないの？」

優美ははつと亜子の目を直視しましたが、亜子にもう引き下がる
気はありませんでした。真実の姿を教えることが真の友情ではなで
しょうか。ただ居候の立場を思わないではいらなかったたので、亜
子は努めて中立的な、誠意に満ちた言い方を心がけました。

「要はもう歳で、女としての賞味期限も切れかかり気味。そろそろ
年貢の納め時だってときに、もろもろ好条件の男といい雰囲気にな
ったから、渡りに船と思っただけじゃないの？ ラッキーって感觸
を恋と思っただけじゃないの？ 恋心を踏みにじられたって
いうより、当てにしていたお手当てが結局もらえなかったってほう
が感覚として近いんじゃないの？」

優美は、あ、そうか、とつぶやくと黙り込みました。怒っている
ようには見えませんでした。が、優美のようなタイプが黙り込むと怖
いものだな、と亜子は思いました。

優美は実際、憑き物が落ちたような気がしていました。やっぱり亜子はいいいことを言う、と思いました。こんなに傷ついているけれど、失恋というのは思い込みで、高額配当だと思っていた宝くじの真ん中の数字が実はひとつ違っていた程度のことなのかもしれない。そう考えると、今までシクシクめそめそイライラしていたのが、馬鹿馬鹿しく思えました。多少腹立たしい言い回しもあったような気はするけれど、亜子はやっぱり私の話をきちんと聞いて、きちんと受け止めてくれている。

「そうか、そうかもしれないね。亜子ってやっぱり頭がいいね」

いや、そういうことじゃないんだけど、と言葉を濁しながら、亜子は口ごもりました。こういうところが常に亜子に勝った気にさせない、優美の嫌な天分だなと思いました。

その日の夕飯は、優美が雑炊を作り、亜子と食べました。常に食欲がないという亜子に、優美が消化のいいものをと、野菜ときのこと鶏肉をご飯と煮込みました。

「そつえば私、失業保険の手続きで一度実家に戻らないといけないんだ。水曜日に一晩あつちで泊まって戻ってくるから、車で駅までの送迎をお願いしてもいいかなあ」

亜子には実家に帰るのも職安に行くのもその移動も全てが重荷でした。でも手続きに行かなければ失業保険の給付は受けられません。亜子は貯金をそれなりに貯めこんでいるので、失業保険を受け取らなくても、さしあたっての生活に大きな影響はありませんでした。でも失業保険給付の手続きすら億劫だと放棄することは、もう一歩も世の中に足を踏み出せない、失意の激流に自分を突き落とすことと同じに思えました。優美はいつものように快諾してくれました。

夜、いつものように先に亜子は部屋に戻り、あとから優美が二階に上がってきました。浅い眠りの中で亜子は、優美の足音が向かいの部屋のドアを開けずに立ち止まっているのに気づきました。ノックの音がして、起きているか、と聞かれたので、うん、と応えると、ドアが開きました。優美がまた一緒に寝ようと言うのかと思うと、

亜子は嬉しくなりました。さつきは本当のこととはいえ、失礼なことを言ってしまった。お詫びに優美の失恋の愚痴を少しは聞こう、という気持ちになりました。しかし優美は部屋に入ろうとはせず、戸口に立ったまま、言いました。

「水曜日のことだけどさ、私も一緒に帰ろうかな」

なんとなく後ろめたそうなその雰囲気、亜子を不安にしました。「それって、もうここには戻らないってこと？」

優美は努めて屈託ないように、首を縦に振りました。

十 崖から落ちてきた友を受け止めないわけにはいかないでしょう？

会社で昼食前にトイレに行ったとき携帯をチェックすると、優美からメールが入っていました。タイトルは「大事件発生」でした。

《お願いだから、昼休みにでも電話して》

これは真に受けたらバカをみそうだ、と思ってしまいましたが、とりあえず昼休みに食事をしてから電話をかけてみました。すると興奮しきった優美の説明が始まりました。

いつものように八時前に起きると、優美は居間で朝食を食べていました。するといつも通りパジャマ姿の亜子が降りてきて、テーブルに座りました。亜子の顔を見た瞬間、優美は「やばい」と思いました。今までは単に暗い、沈鬱といった表情で、それはそれで優美には重荷だったのですが、今は焦点も覚つかず。おそらく一睡もしていないでしょう。芝居がかっているほどに憔悴しきって目も虚ろでした。コーヒーは胃に堪えると朝はミルクティーを飲むのが亜子の習慣なので、ミルクティー飲むかと聞くと、黙って頷きました。亜子はそれ以後一言も口をききませんでした。なにかを言いあぐねているのは明らかでした。優美が食べ終わかけると、思い切ったように亜子は、

「今、東京に完全に帰らなくちゃいけないというのは、正直しんどい」

と言うなり、はらはらと涙をこぼし始めました。もちろん優美はぎょっとしました。亜子は映画やテレビの泣かせのシーンでまともに泣くタイプなのですが、こういうふうに泣く亜子を見るのは初めてでした。私は実際は見ていませんが、やはり驚いただろうと思います。それなりに大事件と言っでいいでしょう。

「帰って、病院に行ったほうがいいんじゃない？　ここいらじゃ力ウンセリングの病院もないし」

突き放すような言い方はしないように努力しましたが、優美は明

らかにもてあましていました。亜子はテーブルに突っ伏したまま首を振り、理由の如何に関らず、断固として拒否する姿勢を示しました。

亜子はこれまで、例えば友人の同僚や知り合いが会社生活のストレスで不眠に陥ったというような人の話を聞くと、神経科にかかればいいのに、と気軽に言いました。世の中にそんな人大勢いるよ、と。かつては「神経質のデブ」という通院患者を日常に目の当たりにしていたせいでしょう。しかしいざ自分のこととなると話は別のようにでした。

私が亜子と話してみようか、と言うと、亜子が泣きながら首を振っていると言われました。慰め手として拒否されたことで、私はそれなりに傷つきました。でもやはり、亜子は崖っぷちに立たされて仕方なく優美に泣きついたのだと、理解しなくてはなりませんでした。それに昔から、私と亜子の間には敬意とともに、一般的なレベルでの緊張やよそよそさがありました。が、亜子と優美の間、あるいは優美と私の間にはありませんでした。男女を問わず短時間で他人と遠慮のない間柄になれるのは、優美の特技の一つです。誰でも優美の前では油断することができました。

「どうしよう」

と携帯の向こうで困り果てた優美の声がしました。私も返事に困りました。またしても私にはどうすることもできません。私が伊豆を訪問するのも、亜子にいい顔されなかったせいで、うやむやのうちに却下されたくらいです。

「亜子がこんなふうに優美を頼るなんて、初めてだね」

言葉の接ぎ穂に困って私がそう言う、優美は、そっ、そっ、とどもり、

「そうかもしれないけど、だったらもうちょっと浅いところで数回に分けて頼って欲しいっていうか、こんな大地震に一気にこられても困るよっ。私だって、今そんな精神的余裕ないもん」

包容力というのは優美にはたいてい無いのですが、そこを指摘す

べき時ではありませんでした。昼休みなので時間もなく、今は判断保留にして、とりあえず亜子を追い詰めるようなことは言わないようにするという結論で電話を切りました。

帰宅してからまた電話で優美と話しました。結論は同じで、一度亜子が実家に帰って一泊するまでは優美は伊豆にいて様子を見るといいものでした。亜子も実家に戻れば、なにか心情に新しい展開があるかもしれません。とりあえず今すぐ亜子を見捨てて優美が実家に帰れるはずありません。どの途一晚は優美が亜子から開放されるのも確かです。その冷却期間に優美自身も状況を整理できます。二人とも冷静さを失った状態のまま、何かを決断するのが得策とは思えませんでした。

部屋のベッドですすり泣く亜子の背中に、優美が実家には当面戻らないことを告げると、

「本当にごめんね、迷惑をかけて」

と亜子は肩を震わせました。すると優美も胸がいつぱいになってもらい泣きました。優美はゆっくりとドアを閉めて部屋を出ようとする、亜子が不安そうな声で、

「出かけるの？」と聞きました。優美は、

「下にいるよ」

と涙声をこらえて穏やかに答えました。亜子はもう何も言いませんでした。

夜八時頃になって夕飯はどうするかと聞くと、亜子は夕飯は要らないと言いました。優美はパンとヨーグルトとハーブティーを部屋に持って行って、出ていきました。深夜になって優美が部屋に戻ると、亜子が部屋を出て行く気配がありました。食器の擦れる音でしたので、おそらく食べて食器を下げているのではないかと予想しました。その後シャワーを使う音などがしました。

優美はベッドに仰向けになりながら、やはりつきあってもいない男との失恋ごときで騒いではいけないのかもしれないと、初めて素直に思いました。東京にいるときは友人たちから、可哀想ね、でも

よくある話ね、という通り一遍の反応を受けました。友人たちの反応の根底には「またか」という思いがありありと横たわっていました。今ではそれでよかったのです。安っぽい反応を受けることで、自分の中の暗さも安っぽくなりました。でも今回は違いました。今までとは違う、いきさつからなにか、「またか」というような状況ではないのだ、と言っても、みな「そうなんだ、いつもと違うんだ。それはわかったよ」という無感動な様子でした。中には「いい気味だ」と感じられる態度すらありました。電話で話したある男友達は、

「お前はいつもいつも。世界には飢餓や貧困、テロ、内紛でまともな生活も送れないひとがごっそりいるんだぞ。少しは視野を広げたらどうだ」

と怒り気味でした。これまでの優美なら、

「そうね、そんな人たちに比べたら私は幸せだよねえ」

と簡単に同意できたのですが、今回は彼の言葉によって、自分の周りに広がる孤独の深さを感じただけでした。

そんな優美が幸か不幸か、亜子の見るも惨めな姿に、自分の傷のことを忘れました。しばらくして亜子が階段を上がる足音がして、部屋の前で止まり、優美の部屋のドアをノックしました。起きてるよ、と答えると、ドアが開いて、

「できれば一緒に寝て欲しい」

と言いました。いいよ、と言うと、亜子は枕と布団を持って、優美のベッドに入りました。亜子が身体を接触しないように、妙にぴしっとしているのがわかりました。

「前に優美があっちのベッドに来たとき、先に寝ちゃったでしょ。となりで優美の寝息を聞いていたら、私もあの夜だけはぐっすり眠れたんだよね」

「亜子さあ、心配のしすぎだよ。私たちくらいの年齢で就職活動したりしてるひとなんて大勢いるよ。それこそシングルマザーで頑張ったり、実家にもおいそれとは帰れなくて、家賃払っていかなく

ちやいけないひとだつて大勢いるよ。そりや時間はかかるかもしれないけど、亜子なんて、頭はいいし、しっかりしてるし、大丈夫だよ。私みたいないい加減な人生歩んでる人間が言つても、説得力ないかもしれないけど」

亜子は優美でもこんなふうにはひとを慰めることができるのかと感心しました。

「私はもう何も楽しいと思えないんだよ。なにかをしたいとかそういう気持ちもなくなっちゃった。どうせ私がなにをしても上手くいかないんだつて気がしてしまうが。それより、何がうまくいったとしても、結局何の意味もないつて気がして仕方がない。あんなくだらない男の一存で、私の生活の全てが台無しにされてしまう程度のものなんだもん、人生つて」

ただひとの話を聞く。これは優美が亜子に長年与え続けた苦痛でした。その上優美は人の話を聞くのが下手で、すぐ自分の話をしようとする悪い癖がありました。でもこの夜だけは、ショックで優美も冷静になり、いつもより広い視点を持つことができたのかもしれない。

「大丈夫だよ。今はそう思ってるかもしれないけど、ずっとそうじゃないよ」

優美はどこかで聞いた台詞の受け売りをしてみました。亜子はずっと我慢していた泣き言を続けました。今までバカにしてきた優美を相手に。優美はうん、うん、と聞き続け、亜子の気分はほんのりと軽くなつていきました。

「なんか夜つて不思議な感じがするね」

亜子の繰言もネタが尽きてきた頃、優美が窓から伊豆の月夜を眺めて言いました。そうだね、と亜子も言いました。するとさも面白そうに、優美が口を開きました。

「私、彼とベッドに入るの、すごく楽しみにしてた。結局ベッドどころじゃなかったんだけど。でもなんで私に手を出そうともしなかったのかって考えると、あのバカ、実は男として自分に自信なかつたのか」

たんじゃないのかなあつて思うの。すっごいあそこが小さいとか、めっちゃ早漏とか。セックス下手で以前そう言われた経験があるとかさ。そういうの、見た目いい分、きついじゃない」

うーん、と亜子は少し黙っていると、優美は付け足しました。

「あとはゲイとかさ」

「そうかもしれないけど、振られた側がそれを言ったらみつともないよ」

やはり亜子は優美を戒めました。優美はひとつ口に出したくて出していなかったことを吐き出せて、またそれを亜子にたしなめられて、すっきりしました。

「まあ、それでも別に構わなかったんだけどね。ゲイは別にして」

亜子も思ったより大丈夫かもしれない、と思って優美は眠りにつきました。

十一 演歌もしくは怨歌

優美は予定通り伊豆高原駅に亜子を迎えに行きました。その日は朝から雨でした。車を停め、そのまま中で改札から出てくる人の流れを見ていると、自己主張の激しい猫背で亜子を確認できてしまいました。亜子の荷物が別荘に残っているもので、このまま大宮の実家に帰ることにならないのはわかっていましたが、ただ荷物を取りに戻ってきたわけではないこともわかりました。亜子は優美の車を確認して、ドアを開けると助手席に身体を投げ出しました。その姿は《ほとんど緊急搬送》でした。優美の淡い望みは消えました。

「半月ぶりに実家帰ってどうだった？」

「ハローワークには悪い霊がいつぱいいた。人生に負けた人間の負の思いが生霊となって、ひしめき合っていた」

優美は亜子がそれなりに元気なら、このまま車で温泉に行こうかと考えていましたが、口に出す前に却下となりました。

別荘に戻ると、亜子は初めて来たときよりもさらに大掛かりにぐったりとソファに身体を沈めました。

「実家に帰ってから職安に行つてここに戻るまで、ものすごいエネルギーを使つたよ。“普通の人”をやるだけですごく大変だった」

なんだかさらに素直になつてきたな、と優美は沈んだ気持ちで思いました。

職安で求人内容を見たりしたのか聞いたところ、どんな内容かもう知っているので、今は職探しをする気も起らないとのことでした。前職と同じような種類の仕事をしようとしたら、給料が下がるのは免れない。多少の減給条件は飲むとしても、それでも年齢で落とされる。最初から年齢制限が明示してあれば応募しないのに、実はあるものが規制によって書かれない。一枚履歴書を書くだけでヘトヘトになるのに、無駄だと思いながら書かなくてはいけない。就職できてもできなくても希望がなく、かといってこの先もずっと就

職活動を放棄して、なにもしないというのにも耐えられそうにない。いったい自分は何の罰を受けているのか。それもこれもあのデブのせいだ。

「ねえねえ、そういえばそのデブ、いくつなの？」

亜子はずまらない質問をする優美に苛立ちました。

「私より五つ年上かな。四十一じゃない」

「へえ、彼と同年かあ」

亜子はまた元カレとも言えない男の自慢が始まるのかと、恐れました。

「やっぱり厄年だよねえ。私は彼のことを恨んで、亜子はそのデブのことを恨んで、二人とも生霊飛ばしまくってるでしょ。別に考えたくないのに、恨みがましいこと考えちゃうし。きつと二人とも無事じゃないと思うのよ。わかんないけど。身辺でいやなことがいっぱい起こっているわ、きつと。そう考えると、なんていうの？ 溜飲が下がるとか言わないつけ、そーゆーの」

「バカじゃないの、あんだ。それならうちのほうがよっぽど厄年っぽい境遇にあるじゃないのよ」

それでも優美は職安の生霊の話を受けて、”前向き”なことを言っただけでした。亜子は《あまりの優美のバカさ、呑気さに深く失笑》して、文字通りがっくりとテーブルに顔を突っ伏しました。

「でもね私、彼が私のところに戻ってくる気がして、仕方ないの」

優美がいつも通りの軽い口調で言ったことに、亜子はぞっとしました。

「なんでそんなこと思うの？」

「わかんないけど、そう思うのを止めることができないんだもん」

《こんな演歌な台詞を優美が言うことになるとは》、と亜子は顔を上げました。

「優美は男の人と心が通ったことがないわけじゃないでしょう。それを思い出せば、今回は違ったと思えるんじゃない？」

「結婚と恋愛は別っていうでしょう？ うちの両親なんて私が物心

ついたときには完全に家庭内別居だもん。心が通わない結婚なんて、いくらでもあるんじゃない？」

「何言ってるの？ 家庭内別居って、それを前提に結婚するものじゃないくて、仕方なくそうなってしまふものじゃないの？」

「わかんないけど、それしかないなら、それでもいいかなって」

優美はまた、バカだと亜子に怒られるのかと思いました。怒ってもらえば、亜子が新しい精神的地平を示してくれるような気がしました。優美の一番の望みは結局のところ、理性と感情の一致、「救われたい」だったと思います。

亜子はそんな優美に、静かに言葉を続けました。

「私もさ、もう本当になにもかもイヤだなって思うよ。でもそう思うことは世間で否定される。傲慢だとか怠慢だとか、甘えだって言われる。なんかしら”前向き”じゃないと許されない。私は私なりに前向きに仕事に取組んできたつもりだけど、あのデブに一瞬で無にされた。それも世間では、かわいそうだとは思うけど、一度の失敗くらいで、ってなる。それよりひどい矛盾に人生で遭遇するひとは大勢いる、経験から学び取れてなる。でもそんな”大勢のひと”が私になんの関係があるの？ もう私、ダメだと思っし、そんなにダメのままじゃないけないのかな」

「誰かに何か言われたの？ ご両親とか？」

優美は、亜子は怒っているけど、とりあえず自分に対してではないのだな、と思いました。

「まさか。親の前でこんなこと思ってるの見せないよ。誰も何も言わないよ。誰も私を面と向かっては責めないよ。私は世の中の価値観の話をしてるの。不運に負けることまで責められるのが世の中でしょ。でも私がこうなのは、私の責任だっていうのを、もう私は放棄したい」

そう言って、亜子はぼろぼろと涙をこぼしました。

十二 反省は常に適切か？

《亜子が伊豆に戻ってから、毎晩一緒に寝てます。言うまでもないけど亜子のリクエスト。朝、私が起きると、亜子も一緒に一階の居間に降りてきます。親鳥にくつついてまわる小鴨みたい。部屋に一人でいると、不安でたまらないんだって。朝は話す元気もないみたいで、がっくりテーブルの前に座って、私が淹れたミルクティーをゆっくり啜ります。半ベその顔で無理に飲もうとする姿は、並みの入院患者でもここまでじゃないだろうってくらいの惨めっただしさです。夕方になると少し元気になってきて、これからどうすればいいんだろうとか、私はもうだめだとか、頑張りたくないとか、頑張ることなんて意味ないとか、そういうことを繰り返します。私も最初はわりと心を込めて、そんなことないよ、とか言ってたけど、

「優美みたいな恵まれたひとにはわからない」
って毎回怒られるし。

「あつさり殺すんじゃない。飽き足りない。あのデブ、家族もろとも呪いで繰り返してやりたい」

なんて言われると最初はマジでびびったけど、とにかく同じ泣き言、恨み言の繰り返しでいい加減麻痺してきた。今では適当に、そんなことないよーとか、怖いこと言わないでよーとか言ってる。返事すらしないうきもある。でもそれで亜子に怒られたことはないよ。とりあえず亜子も口に出して言いたいよね。その気持ちはわかる。私も昔男とうまくいかなくなると、友達に愚痴こぼしてた。それって結構申し訳なかったなーと今は思ってる。愚痴って聞き苦しいね。まともには聞いてられないよ。今まで私、あまりひとに愚痴こぼさなかったことないかも。こぼすほうはよくやったけど。その罪滅ぼしと思って今は我慢してます。でも私は亜子みたいにひどくないっていうか。その辺わかってたつもりよ。だからなるべくたくさんの人に

愚痴こぼして、ひとりに集中させないようにしたし、なるべく聞いて面白いように話してたつもりだし。殺すとか、怖いことは言わないし。それなりに聞くひとに気を使ってたつもり。

そういえば、この前四ヶ月ぶりに生理になった。久しぶりだったせいもあって、すっごいお腹が痛くなった。とてもじゃないけど一緒になんて寝てられないし、亜子の介護も放棄して、昼間から自分の部屋のベッドで横になってたの。そしたら亜子が部屋に来て、大丈夫ってきいてくるから、病気じゃないし、原因わかってるから、寝てればそのうち治るって応えたの。でもベッドのそばに椅子置いて座って、不安そうな顔したまま、部屋から出て行かないのよ。すごくお腹が痛いし、なんなんだろう、って思ってたら、

「私、今まで弱いひとのことをバカにしてた。弱い人は自分は弱いんですって甘えてるだけだと思ってた。誰だって日常を戦いながら生きることなんて普通なのに、いちいち落ち込んだ姿をさらしたりするの、見苦しいって思ってた。それで結局参ってしまった、神経科とか通ってる人もかわいそうだって思いながらバカにしてた。だけど今の私は神経科にかかる気力もない。

なにかあったとき被害者面するひとも嫌いだっただ。自分に非はなくて、相手や状況に非がある、そう言うだけで、状況打開のために何をするわけでもない。例えば嫁姑問題のことなんかで愚痴る女友達は、なんてみっともないんだろって思ってた。でも今は“被害者”を自認しなくちゃ、やっていけないひとの気持ちはわかる。不本意な状況に、歯噛みしながら甘んじなくちゃいけないひとの気持ちもわかる」

って、突然反省し始めちゃって。それで思ったんだけど、亜子って、生理痛が全くない珍しいタイプらしいのよ。こっちで生理になったとき、事前にわからなかったのはそのせいもあるみたい。だから私が寝込んでいるのも、生理痛よりも介護疲れが原因じゃないか、って思ったんじゃないかな。私がそれで体調崩して東京に戻るんじゃないかって、不安になってるのかもって思った。とにかく私はお

腹が痛かったし、とにかくひとりにして欲しかったただけなんだけど。エリートって挫折に弱いね。

こうして病人の亜子と別荘に二人きり、三食私が作って片付けて、掃除も買い物も全部私がやっています。飲み会とか、遊びの約束とか、いろんなひととのメールのやりとりとか、男といちゃついたりとか、私の生活はそういう楽しいことで埋め尽くされていなくちゃだめだって、つい最近まで信じていたのに、そんな自分が過去のものになってきてる。今のこんな状況が、こんなもんでしょ、ってそんなに不満じゃないのが不思議。ずっとこれじゃ困るけどね。今の生活は面白くもなんともないし、亜子もうっとおしいなあって本当に思うけど、でも、今の私はこの数ヶ月間のずっとそうだったみたいには、自分を持て余してない。だから介護してる。亜子が心配だからじゃなくて、自分が余計なこと考えなくなって、楽になってるから介護してる。本当に私は利己的だなって思う。よくよく考えると、私は今までずっと利己的だった。

亜子は夕飯はわりとしっかり食べる。そして夜になるとベッドで、私はどうせ駄目な人間だとか、生きていても仕方ないとか、全ての人生に生きる価値があるわけじゃないとか、また愚痴をこぼし始める。一度、亜子なんて仕事できるし、努力家だし、しっかりしてるから大丈夫だよ、って慰めてみたら、

「私の人生は挫折ばかりだった。大学受験だって第一希望の早慶は落ちるし、就職活動だって第一志望の新聞社は全滅だったし、結婚したくないわけじゃないのに、結婚はおろかきちんとした彼氏もないし。いつもきちんとして生きて、公共心とか道徳を重んじて、その時々で人並み以上の努力してるつもりなのに報われない。それでも与えられた職場でベストを尽くしているつもりだったのが、たったひとりの下らない男のせいでこの始末。いつも人生には煮え湯を飲まされてる」

って、倍返し以上の返事が来たわけよ。言うことなくして仕方ないから、

「まあ、とりあえずはここにいればいいよ」

って言うと、ぐすんぐすんって泣き始めるの。毎晩だよ。最初はかなりヤバいんじゃないかって、ドキドキしたけど、もうなんとも思わなくなった。身内とか関係者じゃないって気楽でいいね。これで亜子がこうなった原因に私が絡んでたり、家族がこうなったりしたらきついけど、そうじゃないもんね。なんか本当にヤバい感じになったり、もう限界だなと思ったら、今度こそ東京に帰るもんね。私には何の責任もないんだから、とりあえずは気楽に介護を続けま

す」。

十三 愛される女性になる法則はあるのか？

私が初めて伊豆の別荘を訪れたのは、十一月に入ってすぐの三連休初日でした。シャツ一枚で外を機嫌よく歩けるような、晴れ渡った爽やかな日でした。優美に駅に車で迎えに来てもらい、別荘に着くと、居間のテーブルに食器がセッティングしてあって、ワインのボトルにグラス、ローストビーフにフランスパン、フォアグラが並べてありました。フォアグラは恐らく、亜子が伊豆に来た日に、優美が歓迎の意を込めて出そうとしたら亜子に引つ込められた缶詰でしょう。ローストビーフはどうしたのかと優美に聞いたなら、

「亜子が作ったの。今、五目寿司も作ってくれてるから」

私が持ってきたケーキを冷蔵庫に入れに台所に行くと、亜子が背中を向けて酢飯と具を混ぜ合わせていました。こちらを向く気配がないので、

「会つのはけっこう久しぶりだね。すごいご馳走じゃない」

と声をかけました。亜子は少し緊張した様子で私にチラリと一瞥を投げると、すぐにお寿司のほうに向き直りました。

「ああ、本当に久しぶりだね。もう少しだから、先にフォアグラとトーストでもつまんでいてよ」

私は、元気そうだね、という言葉は飲み込みました。私も五年以上は会っていないかったし、亜子がそれほど「激痩せ」したかどうかはわかりませんでした。

亜子は一週間ほど前、突然就職が決まりました。最後に面接した会社では最後の二人に残りましたが、亜子は結局不採用でした。そのショックをきっかけに亜子は一時就職活動を放棄し、療養生活に入ったのですが、その法律事務所から今になって採用の連絡が来たとのことでした。そのとき採用された二十代後半らしき女性が、数ヶ月で辞めてしまい、改めて採用試験を行うのも手間なので、もしまだ亜子が無職ならどうかという連絡が、携帯に来たそうです。亜

子が一時帰宅から伊豆に戻って、約一ヶ月が過ぎていました。

この連絡がきて、亜子はあっさり治癒してしまいました。本人曰く、一年前の熟睡はないとのことなのですが、夜もひとりで眠れるようになり、食欲も回復、午後は毎日海岸まで往復三十分の坂道をマラソンするようになりました。

そして優美共々伊豆を引き上げることになり、快気祝いと就職祝いを兼ねて三人で食事をしようというお誘いが来ました。私は喜んで招待を受けました。食事は介護のお礼の意を込めて、亜子を取り仕切ることになったそうです。

五目寿司が出来上がり、本当に久しぶりに、三人で乾杯をすることにしました。音頭は進んで亜子を取り、口上を始めました。私が緊張してしまいました。

「えーと、皆様、いろいろご心配をおかけしました。特に優美には一方ならぬお世話になり、お礼は今後ゆっくり返してしていくことにして、今日はとりあえず、形だけですが、最初のお礼を言わせてください。いろいろありがとうございます」

優美は、やだゝなにもしてないよと、恥かしそうに、嬉しそうにしていました。なんだか私が泣きそうになりました。

「それに、いろいろ悪かったわ」

亜子はそうつけ足しました。優美は意味がわかるのかわからないのか、少しぼけっとしていました。

そのあとは昔話に花を咲かせました。ワイン一瓶と缶チューハイ、缶ビールが用意してありましたが、次々と空いていきました。優美はお酒がそれほど好きでないのであまり飲まないのですが、ほろ酔い加減の私たち二人を聴衆に、今回の失恋やこれまでの恋愛について延々と語り続けました。私はだいたい知っているエピソードばかりでしたが、改めて興味深く聞かせてもらいました。そして話も尽きたころ優美は、

「でもさあ、やっぱり亜子が先に立ち直ったよね」

と言いました。私は少しヒヤリとしました。亜子は黙って、優美

が言葉をつなぐのを待ちました。

「亜子、伊豆に来たとき、絶対亜子より私のほうが先に立ち直るって言ってたんだよ」

亜子は、しらばっくれるという選択肢は取らないようでした。

「優美も止まってた生理が来たじゃない」

「そうだけど。でも、やっぱり私、まだ彼が私のところに戻ってくるんじゃないかと思ってる。そんなことあるわけないって頭ではわかってるのに、気持ち全然ついてない。そのことが苦しいままだもん」

優美にからむような気配はありませんでした。あまり考えないで発言している様子はいつもの優美でした。

「そっか。私も、今度の再就職先が、ずっと働ける職場かどうかなんてわからない。採用された子が辞めたのも、こんな会社ではやっていけないって、逃げた可能性だって低くない。会社からは何の説明もなく、急に辞められてしまっ、って言われただけだからね。不安のほうずっと大きい。それに私だってあの神経質のデブに対する恨みを忘れたわけじゃない。でも実際私はこうして回復したんだよね。現金にも。そうなんだけど、でもやっぱり、神経質のデブより、筋肉質のバカに傷つけられるほうが幸せなんじゃないかって思ってるよ」

私は一泊して帰る予定でした。上げ膳据え膳はあんまりなので、片付けは私がすると言いましたが、亜子がひとりですって聞いて聞きませんでした。亜子が言い出したらつけいる隙がないので、私は早々に諦め、亜子が台所で洗い物をしている間、優美と居間で見るともなしにテレビをみていました。するとテレビ台の上に、例の恋愛指南書「愛される女性になる法則」があるのに気づきました。優美は私の視線を俊敏に察知すると本を取り、私に差し出しました。「これ、よかったよ。智子も興味あるなら、持って帰りなよ。結婚して決まった相手がいるひとこそ、なおさら読んだほうがいいって

書いてあつたよ」

優美は私に熱い視線を投げてきました。私は一瞬迷いましたが、遠慮することになりました。

「でも優美はひとつのことをやり遂げたと思うよ。今回は尊敬した」私は正直な気持ちを言いました。すると破顔一笑、優美は得意満面の笑みを浮かべました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8418k/>

失恋女と失業女

2010年10月8日12時51分発行